

善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12

弘田川西岸遺跡
本村道上遺跡
永井櫻田遺跡
石川首塚遺跡
菊塚古墳

平成22(2010)年3月

善通寺市教育委員会

例　　言

1. 本書は善通寺市教育委員会が平成21年度国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財調査事業（善通寺市内遺跡発掘調査事業）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は善通寺市善通寺町920-1（弘田川西岸遺跡・H21HTG）において平成21年5月8日・13日、同善通寺町2-2・3（本村道上遺跡・H21HMM）において平成21年9月14日から17日、同中村町442-2・下吉田町803-6ほか（永井櫻田遺跡・H21NIE）において平成21年9月29日から10月2日、同10月15日から10月20日、同福木町字石川394-1（石川首塚遺跡・H21IKK）において、平成22年1月13日から1月24日まで発掘調査を実施し、調査中および調査終了後に各遺跡の調査資料と出土遺物の整理作業を実施した。現地調査は、弘田川西岸遺跡については、善通寺市教育委員会生涯学習課課長 笠川龍一が、他の遺跡については同主事海邊博史が担当した。整理作業・報告書作成は、笠川の指導のもと、海邊が担当した。現地調査および整理作業に参加した調査補助員は下記に記す。
3. 平成14年度善通寺市内遺跡発掘調査事業で同善通寺町字大池東所在、菊塚古墳（H14KD）石室内から出土した遺物について、平成15年度から国庫補助事業（保存処理事業）を実施している。本書において、平成16年度に実施した保存処理および分析成果の一部を掲載する。
4. 本書の執筆は海邊および、古美術すぎもと・杉本和江が行った。執筆分担は、付章を杉本が、その他を海邊が行った。編集は海邊が行った。
5. 各遺跡の実測は、海邊および調査補助員が行った。写真撮影は笠川および海邊が行った。また本書に掲載した挿図の実測・製図は、海邊および調査補助員が行った。なお、遺物実測図中、土器の断面は黒塗りが須恵質、白抜きが土師質・陶磁器などを表す。
6. また、事業実施および本書の編集にあたっては、次の方々・機関よりご教示、ご協力を得た。記して謝意を表す。
香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・岩井土地開発株式会社・善通寺市建設経済部土木課・石田　猛・大河内義雅・大嶋和則・大平國丸・小野秀幸・片桐孝浩・加納弘之・川端　聰・高上　拓・多田善昭・田村隆明・長井博志・信里芳紀・乗松真也・松田朝由・松本和彦・森　格也・山元敏裕・渡邊　誠（順不同・敬称略）

【調査補助員】

大浦哲也・越智広二・海邊麻理子・片桐節子・桑島和茂・小阪泰則・鈴木將元・田中純子・西尾明美・横田茂夫

目 次

例 言

第1章 遺跡周辺の位置と環境	1
第2章 弘田川西岸遺跡	6
第1節 調査の経緯と経過	6
調査日誌（抄）	7
第2節 調査の成果	7
① 基本層序・遺構	7
② 遺物	8
第3節 調査のまとめ	10
第3章 本村道上遺跡	11
第1節 調査の経緯と経過	11
調査日誌（抄）	12
第2節 調査の成果	12
① 基本層序・遺構	12
② 遺物	16
第3節 調査のまとめ	19
第4章 永井櫻田遺跡	20
第1節 調査の経緯と経過	20
調査日誌（抄）	22
第2節 調査の成果	22
① 基本層序・遺構	22
② 遺物	27
第3節 調査のまとめ	30
第5章 石川首塚遺跡	33
第1節 調査の経緯と経過	33
付 章 菊塚古墳出土辻金具について	34
第1節 はじめに	34
第2節 個別の知見	34
第3節 中央部の素材について	35

主要参考・引用文献	43
-----------	----

写真図版	47
------	----

挿図・表目次

第1図 善通寺市遠景	1
------------	---

第2図 調査地と周辺の主要遺跡	2
-----------------	---

弘田川西岸遺跡

第3図 調査地位置図	6
------------	---

第4図 トレンチ配置図	7
-------------	---

第5図 出土遺物実測図	9
-------------	---

本村道上遺跡

第6図 調査地位置図	11
------------	----

第7図 トレンチ配置図	13
-------------	----

第8図 第1・2トレンチ平・断面図	14
-------------------	----

第9図 第3・4トレンチ平・断面図	15
-------------------	----

第10図 出土遺物実測図①	17
---------------	----

第11図 出土遺物実測図②	18
---------------	----

永井櫻田遺跡

第12図 調査地位置図	20
-------------	----

第13図 トレンチ配置図	21
--------------	----

第1表 トレンチ番号新旧対照表	23
-----------------	----

第14図 第1～5トレンチ平・断面図	24
--------------------	----

第15図 第6～8・10トレンチ平・断面図	26
-----------------------	----

第16図 第9・11トレンチ平・断面図	28
---------------------	----

第17図 第12～15トレンチ平・断面図	29
----------------------	----

第18図 出土遺物実測図	31
--------------	----

石川首塚遺跡

第19図 調査地位置図	33
-------------	----

菊塚古墳

第20図 墓の各部の名称	36
--------------	----

第21図 泣金具実測図	40
-------------	----

図版目次

弘田川西岸遺跡

図版 1-1 第1トレンチ遠景（南から）	49
図版 1-2 第1トレンチ土層断面（東から）	49
図版 1-3 第2トレンチ近景（西から）	49
図版 2-1 第2トレンチ遺構断面（南から）	50
図版 2-2 第3トレンチ遠景（南から）	50
図版 2-3 第3トレンチ断面（東から）	50

本村道上遺跡

図版 3-1 第1トレンチ東壁（西から）	51
図版 3-2 第1トレンチ東壁埋甃（西から）	51
図版 3-3 第2トレンチ地下室状遺構検出状況（北西から）	51
図版 4-1 第2トレンチ地下室状遺構完掘状況（東から）	52
図版 4-2 第2トレンチ地下室状遺構（便所）完掘状況（北から）	52
図版 5-1 第2トレンチ地下室状遺構北側通路（南から）	53
図版 5-2 第2トレンチ地下室状遺構南側通路（北から）	53
図版 6-1 第3トレンチ東壁（西から）	54
図版 6-2 第3トレンチ全景（南西から）	54
図版 6-3 第3トレンチ遺構埋土（南西から）	54
図版 7-1 第3トレンチ遺構完掘状況（南から）	55
図版 7-2 第4トレンチ深掘り状況（南から）	55
図版 7-3 第4トレンチ深掘り内 SP-04（東から）	55

永井櫻田遺跡

図版 8-1 第1トレンチ全景（南から）	56
図版 8-2 第1トレンチ溝断面（南から）	56
図版 8-3 第2トレンチ全景（南から）	56
図版 9-1 第3トレンチ全景（南から）	57
図版 9-2 第4トレンチ全景（南から）	57
図版 10-1 第5トレンチ全景（南東から）	58
図版 10-2 第5トレンチ落ち込み（東から）	58
図版 11-1 第6トレンチ全景（南東から）	59
図版 11-2 第6トレンチ落ち込み検出状況（南から）	59
図版 11-3 第6トレンチ落ち込み完掘状況（東から）	59
図版 12-1 第7トレンチ全景（西から）	60
図版 12-2 第7トレンチ堆積状況（西から）	60

図版12- 3	第8トレンチ全景（東から）	60
図版13- 1	第9トレンチ北側溝検出状況（西から）	61
図版13- 2	第9トレンチ北側溝完掘状況（西から）	61
図版13- 3	第9トレンチ北側溝完掘状況拡大（西から）	61
図版14- 1	第9トレンチ北側溝堆積状況（西から）	62
図版14- 2	第9トレンチ深掘り・拡張部完掘状況（北から）	62
図版14- 3	第9トレンチ南側溝堆積状況（北から）	62
図版15- 1	第10トレンチ全景（南から）	63
図版15- 2	第10トレンチ落ち込み堆積状況（南から）	63
図版16- 1	第11トレンチ全景（南から）	64
図版16- 2	第11トレンチ落ち込み検出状況（南東から）	64
図版17- 1	第12トレンチ全景（南東から）	65
図版17- 2	第12トレンチ溝堆積状況（南から）	65
図版17- 3	第13トレンチ全景（南から）	65
図版18- 1	第14トレンチ溝検出状況（南東から）	66
図版18- 2	第14トレンチ溝埋土堆積状況（南から）	66
図版18- 3	第14トレンチ溝完掘状況（南から）	66
図版19- 1	第15トレンチ溝検出状況（南西から）	67
図版19- 2	第15トレンチ溝堆積状況（南から）	67
図版19- 3	第15トレンチ全景（南から）	67

第1章 遺跡周辺の位置と環境

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師(空海)が誕生した場所として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の土砂堆積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角洲などから形成されている。南から北に下る緩やかな傾斜になっているため、たいがいの場所から瀬戸内海や対岸の岡山方面を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には、まれに縄文土器片が包含されていることが知られていたが、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したことが確認されている。

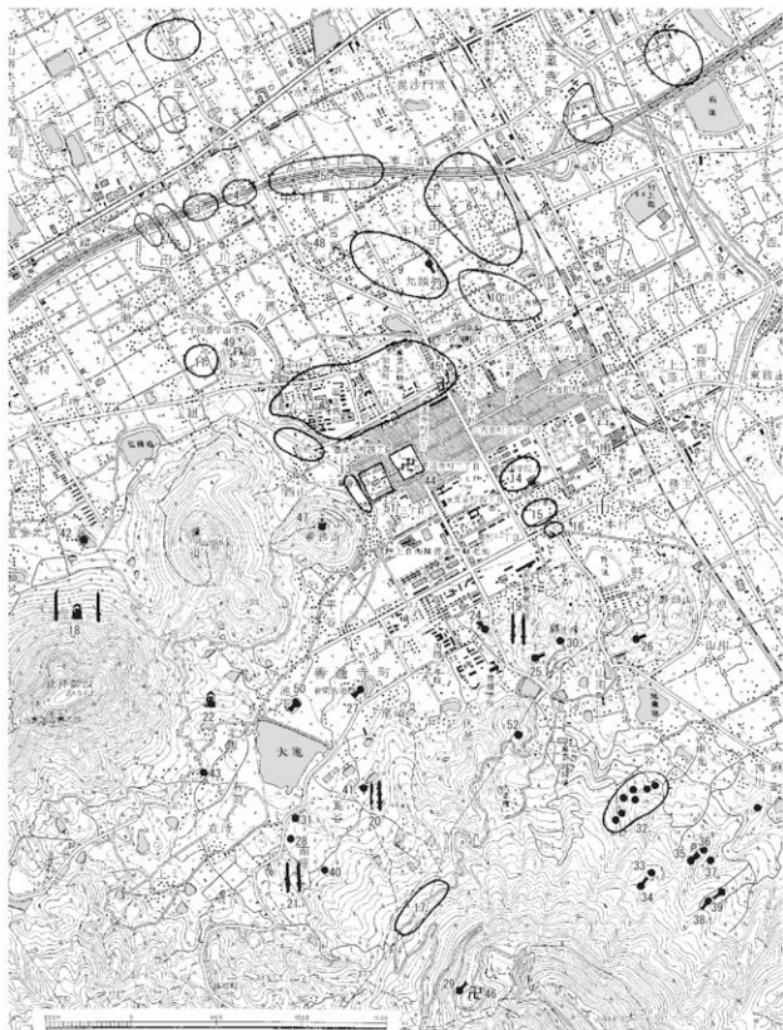
善通寺市の北には、讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓を連ねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、古くから信仰の対象であった。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、古くから文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から多度津町にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期古段階の弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では遺構・遺跡の範囲などについては現在も詳細は不明であるが、出土した弥生土器は畿内第1様式中段階から新段階に相当することが確認されている。

これらの遺跡群は自然堤防上に立地しており、現在の海岸線から2~3kmの距離があるが、当時の海岸線が現在の標高5m付近と推定すれば、三井遺跡や中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されている。また、四国横断自動車道路建設に伴う



第1図 善通寺市遠景



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

- 1：阿弥陀堂遺跡 2：高熊遺跡 3：乾遺跡 4：中村遺跡 5：永井遺跡 6：稻木遺跡群 7：金蔵寺下所遺跡 8：五条遺跡 9：九頭神遺跡群 10：石川遺跡 11：甲山北遺跡 12：旧練兵場遺跡群 13：香色山遺跡群 14：四国学院大学構内遺跡 15：生野本町遺跡 16：生野南口遺跡 17：御忌林遺跡 18：我拝師山遺跡群 19：鶴が峰西麓遺跡 20：瓦谷遺跡 21：南原麻坂遺跡 22：北原シンネバエ遺跡 23：下吉田八幡古墳 24：丸山古墳 25：鶴が峰4号墳 26：磨臼山古墳 27：王墓山古墳 28：宮が尾古墳 29：野田院古墳 24～29：国指定史跡（有岡古墳群）30：鶴が峰山頂古墳 31：御館古墳 32：岡（南光）古墳群 33：丸山1号墳 34：丸山2号墳 35：寺田1号墳 36：寺田2号墳 37：熊の巣古墳 38：大麻山桜貸塚古墳 39：大麻山経塚古墳 40：宮ガ尾2号墳 41：瓦谷1号墳 42：大塚池（吉原桜貸塚）古墳 43：北原古墳 44：善通寺伽藍 45：仲村鹿寺 46：野田院跡 47：香色山経塚 48：仲村城跡 49：甲山城跡 50：菊塚古墳 51：三井遺跡 52：梅池西手山頂墳3号

第2図 凡例

埋蔵文化財の発掘調査によって、市内吉原町から旧石器も出土しており、現在のところ本市の古代文化は約2～3万年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には、香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまでおよんでおり、ここが旧陸軍第11師団の練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。

昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小堀壺十数点・多数の土器、石器類が出土した。また、県道整備工事の際に国立病院付近から弥生土器に加えて須恵器や小玉などが大量に出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまでおよんでいることが確認された。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲にあらわす可能性が強いばかりでなく、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる、県下でも例のない存在であることが分かっている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが判明し、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群では、これまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主な調査を順に紹介する。総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。昭和58年には、遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村鹿寺（伝導寺跡）の発掘調査が実施され、寺域の北端やその下層の弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。昭和59年には、善通寺西遺跡から弘田川沿いの約600m下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500m²の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居・小堀壺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘立柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部など、多くの遺構・遺物が確認された。特に弥生時代終末期の竪穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる彷彿とし文花鏡片の懸垂鏡や銅鏡、多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500mの仙

遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。その後も、国立善通寺病院や四国農業試験場などではこれまで頻繁に発掘調査が行われているが、いずれの調査でも住居跡が複合し密集した状態で遺存しており、正確な集落の規模は今も把握できていない。この遺跡の東側には九頭神遺跡・稻木遺跡・石川遺跡と続いている。

また、ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居や小児壺墓・箱式石棺墓などが確認された。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。九頭神遺跡の北方に隣接する稻木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年から昭和60年にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二度実施されており、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも複数の旧河道間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいずれも同時期に併存したものであることもわかる。したがって弥生時代頃の善通寺周辺部には、“大集落”というよりはむしろ“小国”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

一方、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・細形銅剣5口・中細形銅鉢1口の計8口、我拝師山遺跡では計3力所から平形銅剣5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など青銅器が数多く出土している。また、近年旧練兵場遺跡では、小銅鐸をはじめ複数個の銅鐸片が出土し話題となった。市内出土の弥生時代青銅器の数が県下出土数の約4割を占めていることは特筆すべきことである。旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本提とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎へ、丸亀平野の肥沃な生産基盤を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が灌漑治水事業などを行い耕作面積を増大させた。この勢力が地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えこの地の勢力はさらに発展を続ける。

この頃の集落域は現市街地の北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定される。この地区の古墳は確認されているだけでも100基以上を数え、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は、前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれている。御忌林古墳と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している。中でも野田院古墳は、標高405m(平地との比高差約370m)という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古級の前方後円墳である。大麻山北麓のテラス状平坦部に立地しており、前方部は盛土、後円部は積石で構築されている。史跡整備に伴う発掘調査によって壺形土器が多数出土した。また、後円部と前方部の具体的な構築方法を確認するなど、多くの成果が得られた。築造年代は3世紀末頃と推測される。

また有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鎧子塚古墳(消滅)・磨臼山古墳・鶴が峰2号墳(消滅)・鶴が峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。王墓山古墳では、石屋形を有する横穴式石室が検出され、内部からは金銅製冠帽や象嵌付き鉄刀、多数の馬具・鉄製品・装飾品・土器などが出土した。また、菊塚古墳でも石屋形を検出し、多数の遺物が出土した。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部を中心に群集墳が多数出現する。現存する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくいものが多いが、宮が尾古墳には周辺の装飾古墳と共通したモチーフのほか、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考える上で極めて貴重な存在と考えられている。

この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯氏の氏寺である伝導寺(仲村庵寺)が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかし、この寺は短期間で消滅し、後に500m程南面に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。奈良時代末、宝龜五(774)年この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師空海が誕生する。平安初期、大同二(807)年に唐から帰朝した空海が、長安の青竜寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として善通寺を建立した。創建当時は四町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂のほか、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の大きな変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように、善通寺の西側に隣接する香色山山頂では平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地に活動の基盤とした豪族(佐伯氏)や善通寺の僧侶達が造り上げたものであるが、中には子孫のために経筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚(香色山1号経塚)が、平成9年夏に発見され注目を集めた。

善通寺は戦国時代、永禄元(1558)年には香川・三好両軍の戦火により焼失してしまう。その後興が始まるのは、やがて江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからのことであるが、四国八十八ヶ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃からであり、八十八ヶ所のうち五力寺が現市内に所在するこの地域は、総本山善通寺を中心門前町として活気を取り戻す。

明治20(1896)年には陸軍第11師団が設置され、門前町に加えて軍都としての性格を帯びるようになり、これに伴い道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特的な景観を呈している。

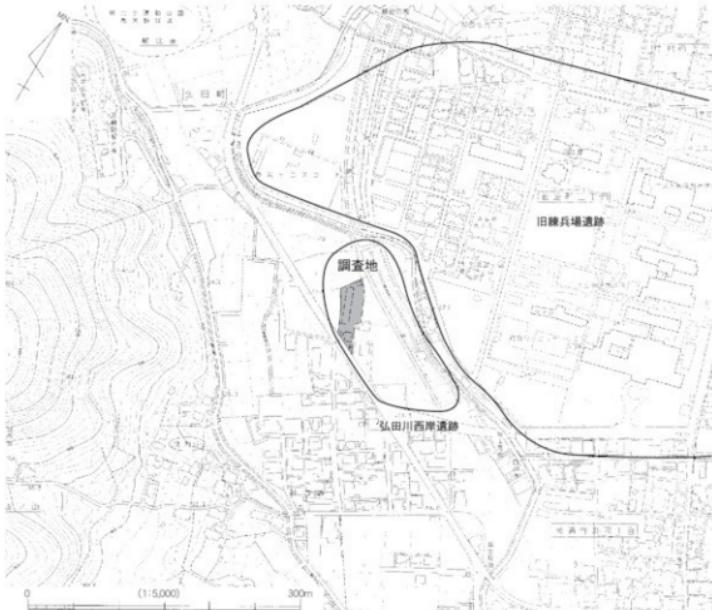
これにより善通寺町として都市化が始まり、昭和29(1954)年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村との合併により市制が施行され善通寺市が誕生し、現在に至っている。

第2章 弘田川西岸遺跡

第1節 調査の経緯と経過

弘田川西岸遺跡は、市街地の西端、善通寺市善通寺町に所在する。弥生時代を中心とした拠点集落である旧練兵場遺跡群と弘田川を挟んだ対岸に位置しており、遺跡群の一角を形成する遺跡と位置付けられている。平成17年に行われた弘田川河川改修工事に伴う発掘調査において、弥生時代中・後期を中心とした集落跡が検出された。遺物は多量の弥生土器、玉類、磨製石剣をはじめ、四国では2例目となる小銅鐸が発見され話題となった。(片桐2008) また南側の善通寺西遺跡からは大量の土師器とともに、櫂をはじめとした木製品が出土している。このように調査地周辺は弘田川が運ぶ肥沃な扇状地上に多数の遺跡が広がっている(第3図)。

当該地においては、分譲住宅地造成の計画が上がったため、試掘調査を実施した。宅地予定地の大部分は現地形よりも約80cmかさ上げされるため、掘削される擁壁部分に限定してトレンチを設定した。調査は、重機および人力にて掘削を行った。そして土層断面の観察、写真撮影、略則による図化作業を行った。トレンチは擁壁ごとに設定した(第4図)。現地調査は笹川が、整理作業は海邊が担当した。



第3図 調査地位置図

調査日誌（抄）

5月8日(金) 天候: 晴

トレンチの設定をする。第1トレンチの重機掘削を行う。第1トレンチの精査を行い、写真撮影、略測を行う。

5月13日(水) 天候: 晴時々曇

第2・3トレンチの重機掘削を行う。精査を行い、写真撮影、略測を行う。第2トレンチでは基盤層を検出し、焼土やピットなどを検出した。

第2節 調査の成果

①基本層序・遺構

当該地は県道からの導入路および宅地予定地からなる。宅地予定地は北側に伸びる不正な長方形形状を呈する。調査地周囲の擁壁予定部分計3箇所にトレンチ設定した（第4図）。

第1トレンチの土層は表土を除くと、2層に大別できる。第1層は茶褐色砂質土層である。いぶし瓦や土器を若干含む層で、水平に堆積している。綺まりは悪い。近世の耕作土である。第2層は暗灰色年質土層である。第1層の下層に位置し水平に堆積している。綺まりは良い。この土層は現地表下約50~60cmで検出した。弥生土器を中心に須恵器、土師器、サヌカイト剥片などを含む遺物包含層である。工事予定の掘削深度はこの土層中までとなるため、下層までは掘削していないものの、周辺での調査成果を勘案すると、この土層の下層に黄褐色粘質土層からなる基盤層が存在すると予測できる。以上のように遺物包含層中までしか掘削を行わなかったため、遺構面は確認されていない。



第4図 トレンチ配置図

第2トレンチの土層は表土を除くと、3層に大別できる。第1層・第2層は、第1トレンチと同質である。第2層は遺物包含層で、弥生土器などが出土している。第3層は黄褐色砂質土で、非常によく締まっている基盤層である。現地表面下約80~90cmで検出した。狭い幅での掘削のため詳細は不明であるものの、ピット1基、焼土坑1基を検出した。他に溝状遺構も検出したが、削平を受けていたため、遺構精査の段階では明瞭に確認することは出来なかった。ピットからほぼ全形が把握できる弥生土器甕（第5図-9）が出土している。これらの遺構は竪穴住居の一部であった可能性が高い。

第3トレンチの土層は表土を除くと、2層に大別できる。第1層・第2層は、第1トレンチと同質である。第2層は遺物包含層で、弥生土器・サヌカイト剥片などが出土している。

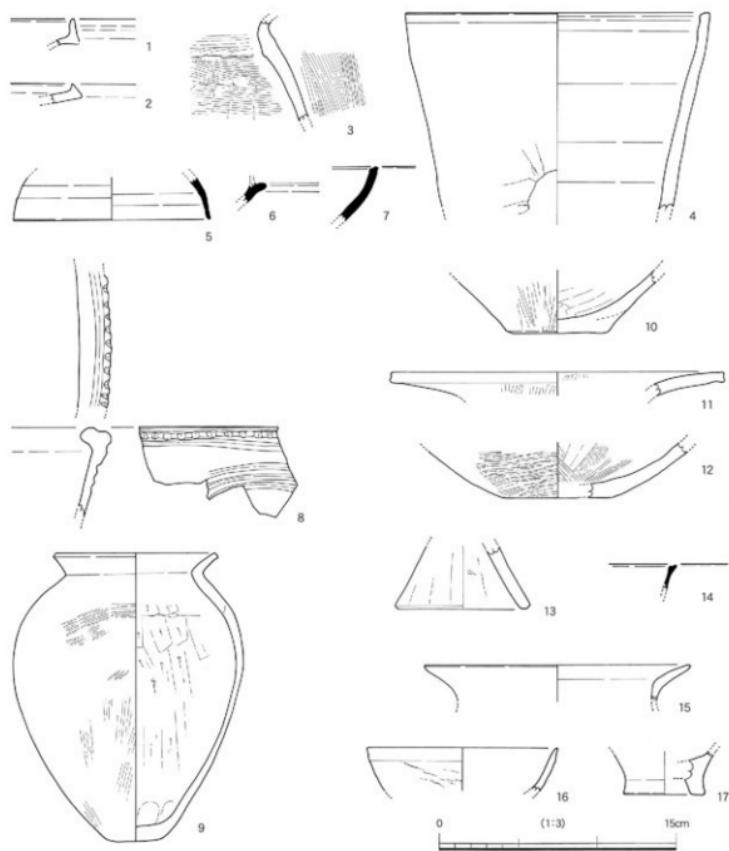
工事予定の掘削深度はこの土層中までとなるため、下層までは掘削していない。よって遺構面は確認されていない。

②遺物

遺物は3トレンチ合計で、18点入りコンテナで1箱と少量である。このうち図化できたのは17点を数える（第5図）。第1トレンチからは、弥生土器をはじめ、須恵器、土師器、サヌカイト剥片などが出土している。これらの大部分は第2層である遺物包含層からの出土である。第2トレンチからは、第2層である遺物包含層が大部分であるが、第3層である遺構埋土からも少量出土している。第3層トレンチではいずれも遺物包含層からの出土である。以下、トレンチ順に解説する。

第1トレンチからは1~7が出土した。図化した遺物はいずれも第2層中からの出土である。1~3は弥生土器甕である。1・2は口縁端部の上端が突出している。3は頸部から胴部にかけて残存する。外面には縦方向のハケメ、内面には接合部の指頭圧痕のち横方向のハケメが目以上に残存する。4は土師質土器甕である。体部はほぼ直線的に開き、口縁付近でやや内傾する。端部は緩い面を有する。体部中央付近に脚部の接合痕が残存する。内面には粘土の接合痕が確認できる。5~7は須恵器である。5は壺蓋で端部内面は緩い面を有する、6は壺身で受け部のみが残存する。端部は丸く收める。7は鉢で内湾した体部を有し、端部は内面に面を有する。いずれも、陶邑・田辺編年のTK217併行期のものと思われる。

第2トレンチからは8~11が出土した。図化した遺物のうち、9はピット埋土から、その他は第2層中からの出土である。8は繩文土器鉢である。口縁部は内側に肥厚し、外面および状面に5~7mm間隔で刻み目を入れる、体部外面には3条の凹線を刻む。繩文時代後期のものと思われる。9は弥生土器甕である。体部が欠損しているものの、ほぼ完形に復元できる。口縁部は明瞭な面を有し、断面形状を呈する。頸部はやや短く直線的に伸び、くの字状に屈曲する。体部の上部約1/3付近が最大径となり、下半部はほぼ直線的にすぼむ。底部を有するものの、安定を欠く。弥生時代後期中葉頃のものと思われる。10~12は弥生土器壺である。10は底部のみが残存する。外面には縦方向のハケメ、内面にはケズリの痕跡が残存する。断面には底部成形時の接合痕が確認できる。11は口縁部のみ残存する。端部は面を有し、面の中央に緩い凹線が1条巡る。12は底部である。底部から体部への屈曲はあまり明瞭ではない。外面には横方向のタタキの痕跡が、内面にはハケメのちケズリの痕跡が残存する。また底部中央部が欠損しているが、穿孔ではない。13は弥生土器高脚部である。脚端部にかけて直線的に広がり、端部は丸みを持つ。14は須恵器



第5図 出土遺物実測図

である。口縁部のみ有し、端部は段を有する。

第3トレンチからは15~17が出土した。いずれも第2層中からの出土である。15は弥生土器甕である。口縁のみが残存する。16は弥生土器鉢である。口縁外面に強い指ナデを施し、端部は丸く收める。17は弥生土器甕の底部である。

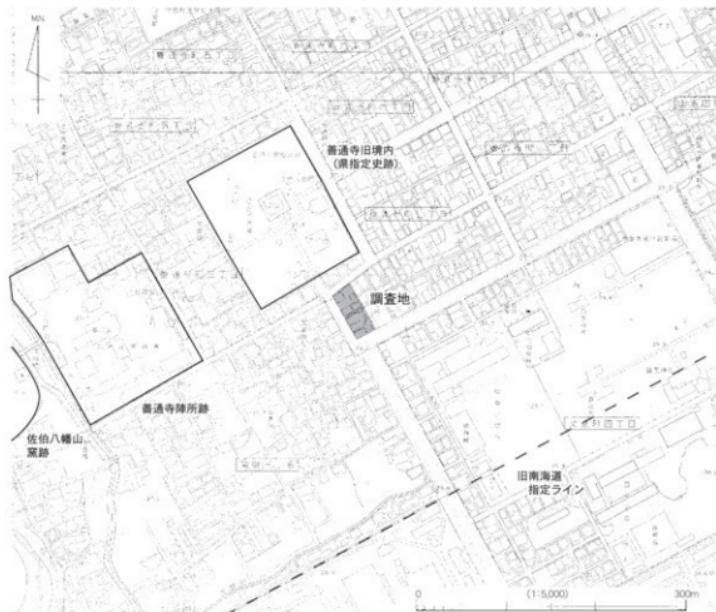
第3節 調査のまとめ

短期間での試掘調査であったため、遺跡の性格付けは困難を伴う。その中で第2トレンチからは竪穴住居の存在を推測できる複数の遺構を確認できたことは、集落域の中心部がさらに広がることを示唆している。また遺物包含層からの出土ではあるが縄文時代後期の遺物が出土したことも特筆できる。この土器は磨滅が比較的少なく、大きな二次移動はしていない可能性がある。弘田川西岸遺跡周辺では善通寺旧境内から縄文土器細片が採集されているものの、明確に縄文時代に遡る遺構は知られておらず、今後も注意するべき地域と言える。

第3章 本村道上遺跡

第1節 調査の経緯と経過

総本山善通寺は平成18年に創建1200年を迎え、それに伴い境内整備が実施されており、いろは会館、聖天堂などの建物の建設に伴い、発掘調査が実施されている（海邊編2004、渡邊編2005・2006）。市としてはまちづくり総合支援事業の一環として、平成12年度より南大門前にぎわい広場整備を順次行っている。当該地はそれまで住宅地となっていたが市が用地買収・建物の取り壊しを行い、現在は暫定的に駐車場として使用されている。今後は、ロータリーおよび道路としての整備が予定されている。総本山善通寺（県指定史跡善通寺旧境内）に近接していたため、周知の埋蔵文化財包蔵地とはなっていなかったものの、確認調査を行うこととなった。



第6図 調査地位置図

調査日誌（抄）

9月14日(月) 天候：曇

基準高のある中央小学校校庭より、レベル移動を行う。現場隣接地（西側）に1箇所、南側歩道上の工事予定地外に1箇所標高杭を打設する。トレーニングを設定し、上面のアスファルト舗装を除去する。

9月15日(火) 天候：曇一時雨

今後の調査のために善通寺伽藍西門外側および東院廿日橋前に標高杭を打設する。各トレーニングにて重機掘削および人力掘削を行う。第1トレーニングでは、現地表面より約0.5m下層で基礎層を検出するが、明確な遺構は検出されなかった。第2トレーニングでは近代の地下室状以降を検出する。第4トレーニングでは当初想定していた面まで到達したが遺構は確認されなかった。

9月16日(水) 天候：晴

第1トレーニングは、精査、写真撮影後、土層断面図を作成する。終了後、埋め戻しを行う。第2トレーニングは、人力掘削により遺構面を検出す

る。明確な遺構は近代のもののみである。検出状況の写真撮影後、遺構埋土の掘削を行う。第3トレーニングは、人力掘削により遺構面を検出する。擾乱が多いものの、部分的に遺構が確認できる。検出状況を確認、写真撮影を行う。第4トレーニングは、トレーニングの北半を深掘りする。昨日認識していた面の下層で基礎層を確認。若干の遺構も確認する。遺構完掘後、写真撮影を行い、平面図・断面図を作成する。

9月17日(木) 天候：晴

第2トレーニングは、遺構面精査し写真撮影を行う。午後から平面図・土層断面図を作成し埋戻しを行う。第3トレーニングは、各遺構の畦の写真撮影、断面図を作成した後、遺構を完掘する。遺構面精査を行い、写真撮影した後、トレーニング平面図、土層断面図を作成する。第1トレーニングは、昨日に引き続き断面図を作成する。

9月18日(金) 天候：晴

第3トレーニング、第4トレーニングの埋め戻しを行う。現地での調査を終了する。

第2節 調査の成果

①基本層序・遺構

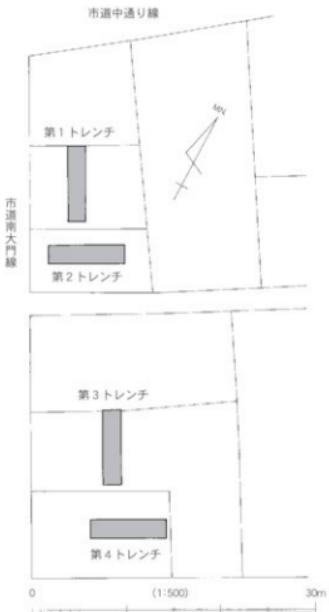
調査区は平成21年度開発予定の敷地内で、かつて鉄筋コンクリート住宅が建っていた場所を避けて計4箇所でトレーニングを設定した（第7図）。

第1トレーニング

土層は整地土を除くと、3層に大別できる（第8図上側）。第1層（第8図-②）は黄灰色粘質土を含む疊層である。近代の遺物を若干含む層で、水平に堆積している。縫まりは悪い。この面の上層から埋甕が埋置されていた（第8図-①）。素焼きの甕で近代のものと考える。第2層（第8図-③）はにぶい黄褐色砂質土層である。第1層の下層に位置し水平に堆積している。縫まりは良い。この土層はトレーニング南側で厚さ約25cm程度検出したが、擾乱坑で削平された中央部より北側では確認できなかった。遺物は京都信楽系陶器や瓦、土器などが出土している。いずれも18世紀以降の所産である。第3層は南側の深掘り箇所で検出した。褐灰色粘質土層である。遺物は出土していない。このように近代の遺構面を確認したのみで、明確な遺構は検出されなかった。

第2トレーニング

土層は、整地土を除くと、4層に大別できる（第8図下側）。第1層（第8図-⑥）は、第2層



第7図 レンチ配置図

の2つの土器は、位置・形状などからそれぞれ大便器と小便器であったと推測できる。通路は、部屋からは南側および西側の2方向に伸びる。西側への通路は部屋から約1.6mの箇所から北側へ屈曲しさらに伸びている。壁面・床面とも、モルタルが塗布されている。通路の壁面は人が容易に通行できるように、上側の方が若干広がっている。地下室状遺構以外の遺構は、検出することができなかつた。地下室状以降に伴う遺物は、前述の軟質土器以外は確認されていない。

第3レンチ

土層は整地土を除くと、3層に大別できる（第9図上側）。第1層（第9図-①）は、にぶい黄橙色粘質土である。近代の遺物を若干含む層で、ほぼ水平に堆積しているが擾乱のために乱れた堆積となっている。第2層（第9図-②）は、黄灰色砂質土層である。第1層の下層に位置し水平に堆積している。遺物は、京都信楽系灯明皿、土師器、瓦などが出土している。第3層（第9図-③）は、にぶい黄橙色粘質土層である。基盤層と考えられ、この面で複数の遺構を確認した。遺構面からは須恵器高杯、土師器などが出土した。遺構は土坑2基とピット7基である。土坑1・2は、擾乱によって削平されているため全体の規模は不明である。

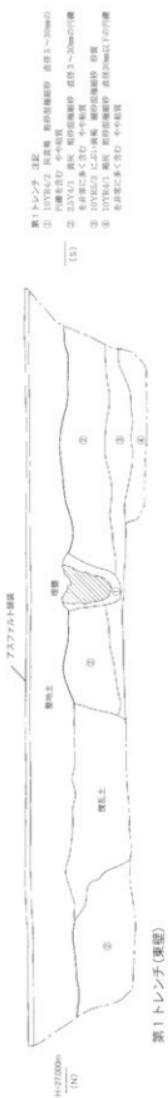
土坑1（SK-01）は、平面橢円形状で、南北0.6m、東西0.45m以上を測る。東側は擾乱のため全形は不明である。深さは0.18mを測る。遺物は出土していない。

土坑2（SK-02）は、平面橢円形状を呈し、南北0.95m以上、東西0.6m以上を測る。東側は

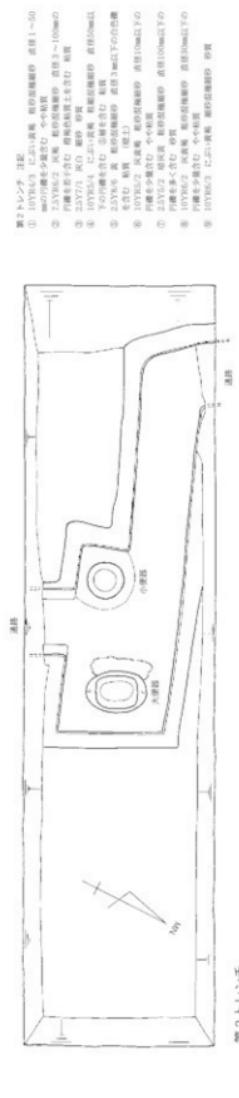
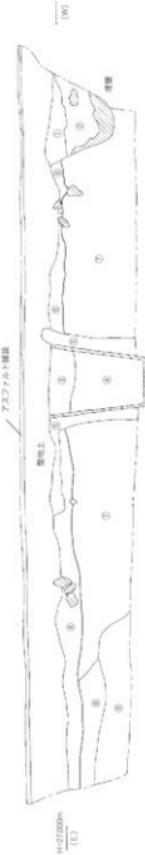
上層に堆積し、この面から後述の地下室状遺構や埋甕が切り込む。第2層は、第1レンチ第1層と近似した疊層である。この層の肩が東側で出ているので、第1レンチ第1層、第2レンチ第2層は、比較的規模の大きな旧河道内の堆積土である。両レンチの状況からこの河道は南東-北西方向に流れていたと推測できる。第3層・第4層（第8図-⑧⑨）は、基盤層と考えられる。遺物は第1・2層から京焼の瓶や灯明皿、堺明石系擂鉢、土師器、瓦などが出土している。17世紀以降のものであり、遺構に伴うものではない。

遺構としては特記すべきものに近代の地下室状遺構がある。この遺構は部屋と通路からなる。壁面は非常に綺麗の良い壁土（第8図-⑤）によって空間が確保され、その内側にモルタルを厚さ0.03mで塗布して構築されている。壁面はほぼ垂直である。部屋の平面は不整な長方形であり、部屋の床面積は2.3m²を測る。床面にもモルタルが塗布されている。部屋の東側には平面長橢円形の軟質の土器があり、埋め込まれている。この土器の前後には小孔が穿たれている。また部屋の西側には平面円形の土器が埋め込まれている。この土器に向かって床面に不整な同心円状に傾斜が付く。

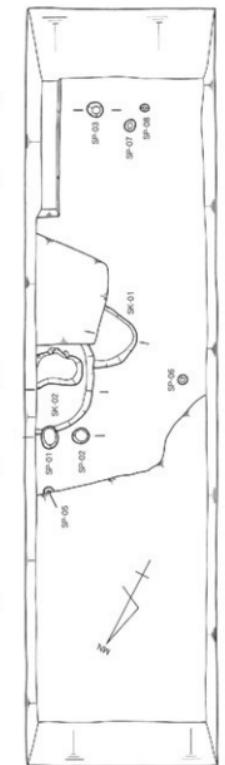
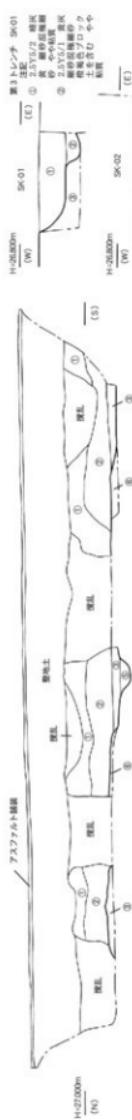
この2つの土器は、位置・形状などからそれぞれ大便器と小便器であったと推測できる。通路は、



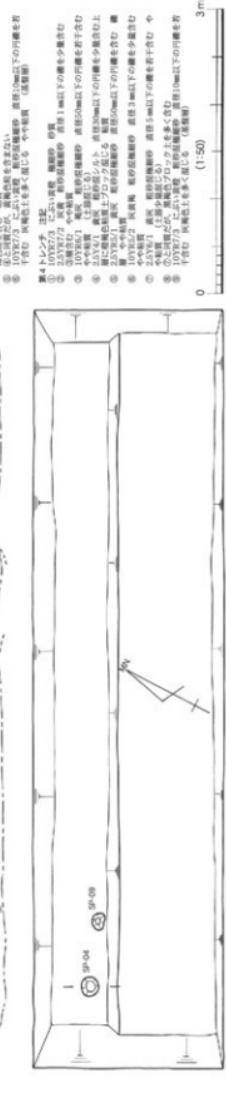
第1トレーニチ(東壁)



第8図 第1・2トレーニチ平・断面図



第3トレチ



第4トレチ

第9図 第3・4トレチ平・断面図（トレチは1:50 各構造は1:20）

トレンチの肩で、南側は攪乱のため全形は不明である。中央部に主軸に直交するように不整形な土坑を穿つ。あるいは時期差のある別の遺構の可能性も否定できない。最深部で深さ0.33mを測る。遺物は埋土から須恵器・土師器の細片が少量出土した。土坑1との重複関係から土坑2の方が新しい。

ピットは、土坑2北側で3基、土坑1西側で1基、トレンチ南端付近で3基検出した。いずれも平面円形もしくは梢円形である。これらのうちピット2(SP-02)で柱痕を確認できた以外は、杭などの痕跡と考える。遺物はピット1(SP-01)から土師質土器細片が出土したのみである。

第4トレンチ

土層は整地土を除くと、4層に大別できる(第9図下側)。第1層(第9図-①②)は、近世の遺物包含層でほぼ水平に堆積している。遺物は、瀬戸美濃系陶器・肥前系陶器・備前焼・土師器・瓦などが多く出土している。時期は17~19世紀と幅がある。第2層(第9図-③~⑤)は、溝1(SD-01)の埋土である。溝1は断面が皿状で、幅4.7m、深さ0.5m以上と、幅に比して浅い。遺物は須恵器・土師器などが少量出土している。第3層(第9図-⑥~⑧)は、中世の堆積層である。第2層の溝はこの層を削っている。遺物は須恵器・土師器・瓦などが下層より少量出土している。第4層(第9図-⑨)は、基盤層である。時間の制約からトレンチ北半のみしか検出することができなかった。この層の上面が遺構面で、トレンチ西端からピット2基を検出した。遺物は出土していない。部分的な検出に留まったためその遺構の性格付けは不明である。

②遺物

出土遺物は4トレンチ合計で、18ℓ入りコンテナで3箱と少量である。近世以降のものが大部分であるが、さかのぼる遺物もある。このうち図化できたのは27点を数える(第10・11図)。

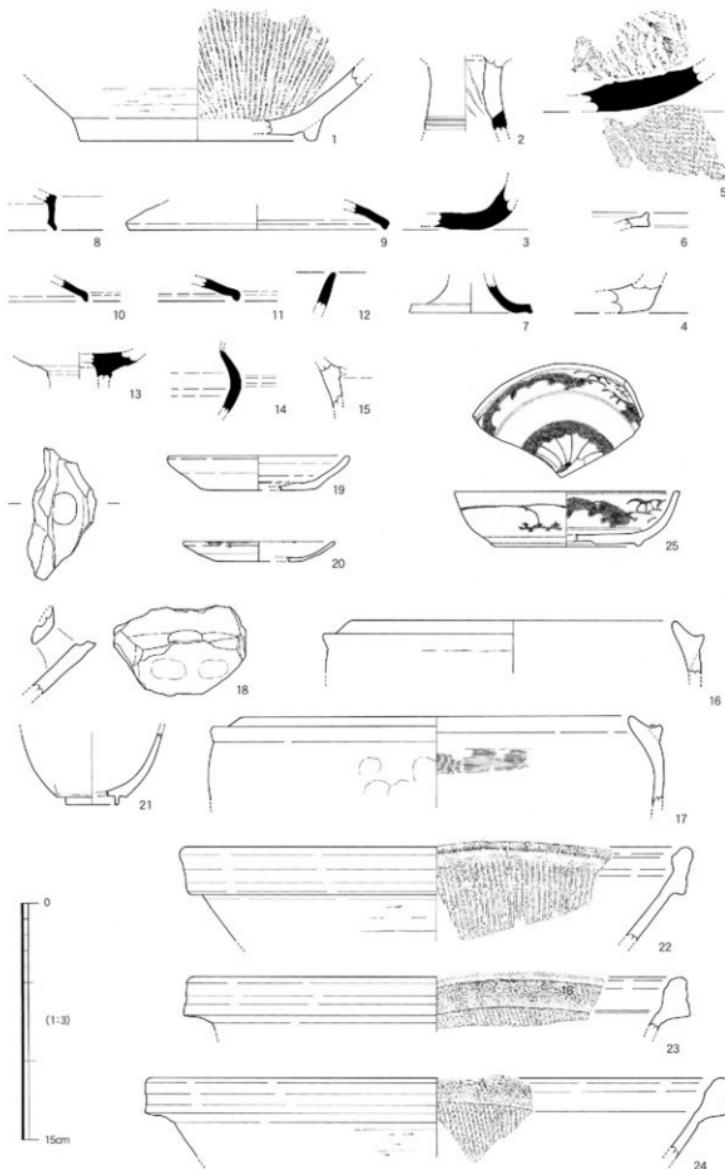
第1トレンチからは、土師器・瓦・陶器など出土したが、近代以降のものが中心で図化出来るものはなかった。

第2トレンチからは、近世陶器を中心に若干の遺物が出土した。このうち、1のみ図化した。1は堺明石系のすり鉢である。上層の整地土中から出土した。厚めの体部には全体に塗り土を施し、張り付け高台を付す。18世紀中頃のものと推測する。

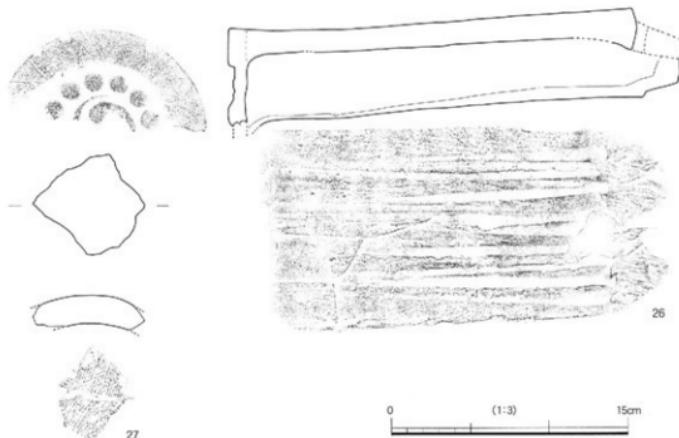
第3トレンチからは、須恵器や土師器などが遺構面上から出土したほか、遺構中からも細片ではあるものの遺物が出土した。このうち6点を図化した。2・3は須恵器である。ともに遺構面上から出土した。2は高坏である。脚部上半のみ残存する。長脚2段2方向透かしで、透かし部の下側に三条の沈線を施す。陶邑・田辺編年のTK43~TK209併行期のものであろう。3は器種不明の底部である。器壁の厚さ、屈曲部の形状から甕の可能性もあるが断定することは不能である。4は弥生土器、5は須恵器である。ともに南側深掘り内から出土した。4は甕の底部と推測できる。5も甕の底部で外面には細かな格子目状のタタキ、内面には当て具の痕跡が残存する。6は弥生土器壺、7は須恵器高坏である。ともに土坑2埋土中から出土した。6は口縁部のみ残存する。端部は断面三角形で上方に伸ばす。7は脚部のみ残存する。端部には面を有する。

第4トレンチからは、第1である遺物包含層からの出土が大部分であるが、第2層である遺構埋土や深掘りトレンチ内からも少量出土している。

8~14・16~25・27はいずれも第1層中から出土した。8~14は須恵器、16~19は土師器、20は備前系陶器、21は京信楽系陶器、22~24は堺明石系陶器、25は肥前系磁器、27は平瓦である。



第10図 出土遺物実測図①



第11図 出土遺物実測図②

8は壺蓋もしくは高壺蓋である。口縁部のみが残存する。端部は面をもち、口縁部には明瞭な稜がある。外面に自然釉が付着する。壺蓋だとすれば陶邑・田辺編年のTK47併行期のものであろう。9~11は壺蓋である。いずれも端部に面をもつ。西編年の飛鳥V併行期に該当する(西1979・1986)。12は壺もしくは椀である。端部は丸く收め、口縁部はやや外反する。13は高壺である。壺部と脚部の接合部のみが残存する。接合部外面に強い窪みがある。14は短頸壺である。体部のみ残存する。最大径付近にごく弱い凹線を施す。16・17は鍋で、共に退化した羽根部を有する。太く短い端部は丸く收め、上方に断面三角形状の羽根部を付す。16・17の形状は非常に似ているものの、16は羽根部以上を体部に接合しているのに対して、17は羽根部のみを張り付けており、製作法が異なっている。いずれも16世紀のものであろう。18は把手付き鍋である。把手部のみが残存する。16世紀末~17世紀前半のものであろう。19・20は皿である。19は端部を丸く收め、体部は回転ナデによって調整される。底部は回転ヘラ切り。14世紀のものである。20は非常に器壁が薄い。端部を丸く收め、内面には塗り土を施す。内外面とも端部付近には煤が付着しており、灯明皿として使われていたことが分かる。18世紀後半のものである。21はいわゆる小杉椀である。体部下半から高台にかけて残存する。底部は面が明瞭にとられ、高台が鋭く付く。22~24はすり鉢である。それぞれ特徴的な玉縁状の口縁を有する。体部は直線的に伸びる。22が18世紀中葉、23・24が18世紀後半のものである。25は皿である。低い蛇の目凹形高台が付く。18世紀後半のものである。27は土師質の平瓦である。凹面には細かな布目痕が残る。15は土師器鍋である。溝1埋土中(⑤層)から出土した。羽部の痕跡が確認できる。外面下半には被熱の痕跡がある。15~16世紀頃のものであろうか。細片ではあるが、溝1の埋没年代を推測する遺物である。26は巴紋軒丸瓦である。第1層(④層)断面中から出土した。瓦当は薄く作られ、巴の尾は短い。外面にはキラコが付着する。18世紀頃のものである。

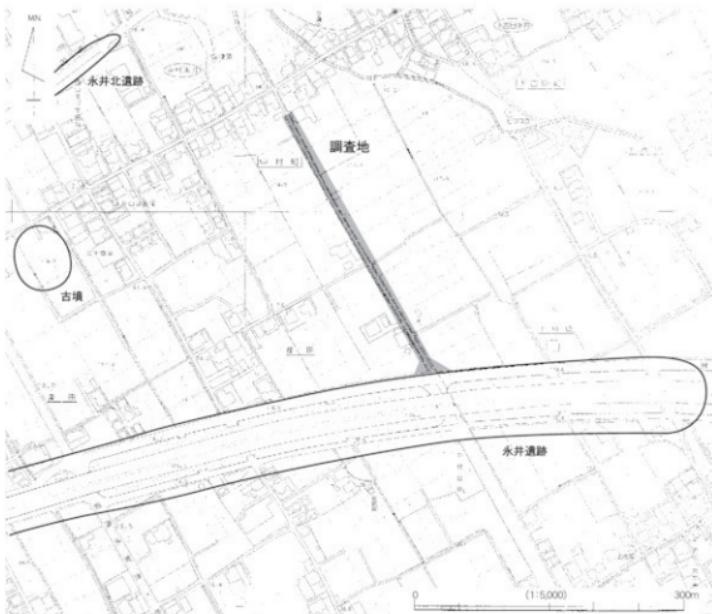
第3節 調査のまとめ

調査地は善通寺旧境内の南側に隣接する。今回の調査区は既に搅乱を多く受けていたため、当初想定していた善通寺関連の明確な遺構は確認されなかつた。第3トレンチ・第4トレンチで検出した土坑・ピットについては、出土遺物が少ないため即断することは出来ないが、上層で比較的多く出土している近世陶磁器が全く入らないことや埋土の堆積状況から、中世以前の所産と推測したい。第4トレンチ断面で確認された溝については、南北方向に伸びることが確認されている。出土遺物や埋土の堆積状況から中世のものと考えたい。善通寺門前近くまで溝が存在すること、そして明確な建物遺構が検出できなかったことから、この時期の当該地に町家が立ち並んでいたということは想定しにくい。いわゆる門前町が形成されたのは、さらに後の時代となる可能性がある。また、今回の調査で特記すべき遺構に第2トレンチで検出された地下室状遺構がある。壁面には全面にモルタルが塗付されていたが、地方の民間建築にモルタルが一般化するのは昭和初期以降とされている。また戦前戦後を通じてこの位置には店舗兼住宅が建っていたが、その家屋に出入りしていた方の記憶によると、地下室はなかったということである。このことによりこの遺構の年代が昭和初期から第2次大戦中までの時期に限定できる。さらに周辺での聞き取り調査により、この場所には戦前に陸軍第11師団御用達の時計店があったことが判明した。戦前に防空壕や貯蔵などを目的とした地下室状遺構が存在しても不思議ではないが、便所遺構を備え双方向に出入り口を作る必然性はない。また隣接地には、軍と関係の深い馬具店、旅館などが並んでいたそうである。上部の家屋が軍部に関わる店であったことも勘案して、その性格付けは様々な推測が可能となる。本遺跡の調査は、上部がアスファルト舗装されていたため、調査区を拡張することは出来ず、遺跡の性格付けなどに不明な点が多い。今後周辺の調査事例の増加により、当遺跡の全貌が明らかになることを期待したい。

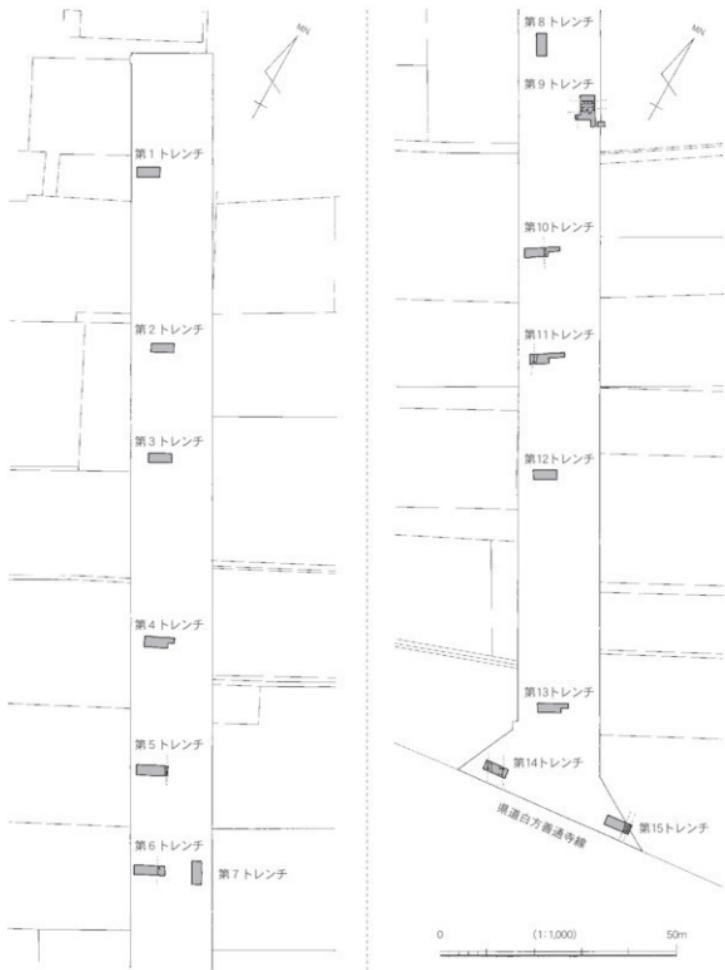
第4章 永井榎田遺跡

第1節 調査の経緯と経過

市道九頭神永井線は、平成20年度までに国道11号線から市道原田鳥坂2号線の区間で拡幅整備工事が終了し、2車線道路がこの区間に供用開始されている。残る南側区間の拡幅および付帯する用水路付け替え工事などが平成21年・22年度において計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地とはなっていなかったものの、縄文時代中・後期の河川や自然遺体をはじめ多様な出土遺物・遺構で著名な永井遺跡や、近年発掘調査が行われ都街闇連施設の可能性が指摘されている永井北遺跡などと隣接しているため、確認調査を行うこととなった。なお作業の都合上、掘削を伴う調査は、2次に分けて実施した。15箇所のトレーニチのうち、第1・2・3・8・10・11・12トレーニチを第1次調査で、第4・5・6・7・13・14・15トレーニチを第2次調査で行った。



第12図 調査地位置図



第13図 トレンチ配置図

調査日誌（抄）

9月15日(月) 天候：曇一時雨

基準高のある永井池土手より、レベル移動を行う。現場隣接地3箇所に標高杭を打設する。各トレンチの設定を行う。

9月29日(火) 天候：曇

本日より第1次調査を開始する。調査地が南北に長いため、さらに2箇所に標高杭を設置する。各トレンチの設定を行う。第1～3トレンチ、第8・10トレンチの機械掘削を行う。順次壁面の精査を行う。

9月30日(水) 天候：雨

雨天のため、現地調査を中止する。

10月1日(木) 天候：曇

第3・8・10・11・12トレンチの機械掘削を行う。第1・2・10・12トレンチの遺構面および壁面を精査し、写真撮影を行う。第1・2トレンチの土層断面図を作成する。

10月2日(金) 天候：曇のち雨

第3・8・11トレンチの遺構面および壁面を精査し、写真撮影を行う。第3・8・12トレンチの土層断面図、第10・11トレンチの平面・土層断面図を作成する。

10月3日(土) 天候：曇一時雨

各トレンチの埋め戻しを行う。本日で第1次調査を終了する。

10月15日(木) 天候：晴

本日より第2次調査を開始する。第7・9・13・14・15トレンチの機械掘削を行う。第13・14・15トレンチの壁面および遺構面を精査し、写真撮影を行う。第15トレンチの土層断面図を作成する。

10月16日(金) 天候：晴

第4・5・6・7・9トレンチの機械掘削を行う。第4・5・6・7・9トレンチの壁面および遺構面を精査し、写真撮影を行う。第7・13・15トレンチの土層断面図を作成する。

10月17日(土) 天候：晴時々曇

第4・5・6トレンチの土層断面図を作成する。

10月19日(月) 天候：晴

第9・13トレンチを拡張する。第5・6トレンチの平面図、第7トレンチの土層断面図、14トレンチの平面・土層断面図を作成する。

10月20日(火) 天候：曇

第9・13トレンチの遺構面および壁面を精査し、写真撮影を行う。第9トレンチの平面・土層断面図を作成する。第15トレンチの平面図を作成する。

10月21日(水) 天候：晴

各トレンチの埋め戻しを行う。本日で第2次調査を終了する。

第2節 調査の成果

①基本層序・遺構

調査区は平成21・22年度に開発予定地内で、かつて住宅が建っていた場所を避けて計15箇所でトレンチを設定した（第13図）。第1次調査・第2次調査それぞれ別個にトレンチ番号を付していたが（第1表）、整理作業の段階において北側から順に番号を振り直したため、一括で詳述する。

第1トレンチ

第1トレンチの土層は整地土を除くと3層に大別できる（第14図）。

第1層は、近世以降の耕作土である（第1トレンチ①②層）。第2層は、灰白色シルト層である（同③④層）。短期間に堆積したと推測できる。この層の上面から南北方向の溝1を検出した（同⑤層）。出土遺物も皆無であるが、埋土の土質から中近世の所産と考えたい。第3層は、基盤層である（同⑥層）。この面から遺構は確認されなかった。

第1表 トレンチ番号新旧対照表

新トレンチ名	旧トレンチ名	調査次
1 トレンチ	1 トレンチ	1次調査
2 トレンチ	2 トレンチ	1次調査
3 トレンチ	3 トレンチ	1次調査
4 トレンチ	II トレンチ	2次調査
5 トレンチ	G トレンチ	2次調査
6 トレンチ	F トレンチ	2次調査
7 トレンチ	E トレンチ	2次調査
8 トレンチ	4 トレンチ	1次調査
9 トレンチ	D トレンチ	2次調査
10 トレンチ	5 トレンチ	1次調査
11 トレンチ	6 トレンチ	1次調査
12 トレンチ	7 トレンチ	1次調査
13 トレンチ	C トレンチ	2次調査
14 トレンチ	B トレンチ	2次調査
15 トレンチ	A トレンチ	2次調査

第2トレンチ

第2トレンチの土層は、整地土を除くと2層に大別できる(第14図)。このトレンチでは遺構・遺物とともに確認できなかったので、深掘りを行い基盤層の堆積状況を確認した。

第1層は、近世以降の耕作土である(第2トレンチ①②層)。第2層は、基盤層である(同③～⑧層)。このうち③層上面が他のトレンチでの遺構検出状況から遺構面となるが、遺構は検出されなかった。基盤層は上層が砂層(同⑨⑩層)、下層がシルト層(同⑪～⑮層)となっている。

第3トレンチ

第3トレンチの土層は、2層に大別できる(第14図)。

第1層は、近世以降の耕作土である(第3トレンチ①層)。第2層は、基盤層である(同②③層)。このうち③層上面が他のトレンチでの遺構検出状況から遺構面となるが、遺構・遺物は確認できなかった。

第4トレンチ

第4トレンチの土層は、2層に大別できる(第14図)。

第1層は、近世以降の耕作土である(第4トレンチ①②層)。第2層は、基盤層である(同③～⑥層)。掘削深度までの基盤層は全て砂層である。このうち③層上面が他のトレンチでの遺構検出状況から遺構面となるが、遺構・遺物は確認できなかった。

第5トレンチ

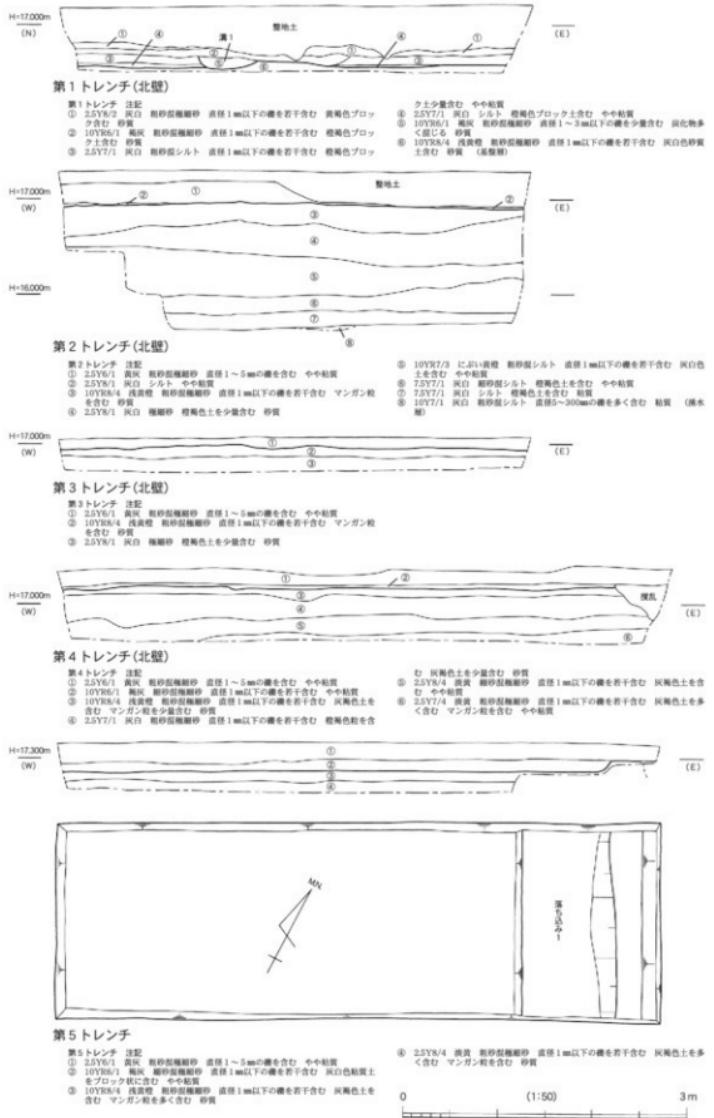
第5トレンチの土層は、2層に大別できる(第14図)。

第1層は、近世以降の耕作土である(第5トレンチ①②層)。このうちトレンチ東側で②層を削平する形で遺構(落ち込み1)を検出した。落ち込み1は西側に向かって下っている。埋土からは近世の陶磁器・染付けなどが少量出土した。またこの遺構面から切り込む東端の擾乱孔からも近世の瓦や染付・土師器が少量出土した。よってこの遺構は、近世以降のものと考える。第2層は、基盤層である(同③④層)。掘削深度までの基盤層は全て砂層である。このうち③層上面が他のトレンチでの検出状況から遺構面となるが、この面から遺構・遺物は確認できなかった。

第6トレンチ

第6トレンチの土層は、3層に大別できる(第15図)。

第1層は、近世以降の耕作土である(第6トレンチ①～③層)。第1層下層は灰白色砂質土である。この層は第6トレンチ以南の第7トレンチから第11トレンチでも確認されている。第2層は、基盤層である(同⑤⑥層)。第1トレンチから第5トレンチまでは、安定した土層である浅黄橙色砂質土層(同⑦層)を基盤層と認識していたが、第6トレンチではこの層の下層から遺構



第14図 第1～5トレーンチ平・断面図

(落ち込み②)を検出した。落ち込み②は第⑤層を切って東側に下っており、第5トレンチの落ち込みとは反対方向に下っている。この落ち込みの存在から第2層である基盤層は、淡黄色砂質土以下(同⑤⑥層)であると認識した。第1トレンチから第5トレンチにかけての基盤層とは層位的な差異があるが、他のトレンチでは浅黄色砂質土層では遺構が確認されなかつたため、遺構面が異なるものと理解しておきたい。第3層は、遺構埋土である(同④層)。遺物は落ち込み埋土中よりサヌカイト剥片・土師器が出土した。

第7トレンチ

第7トレンチの土層は、2層に大別できる(第15図)。

第1層は、近世以降の耕作土である(第7トレンチ①②層)。第2層は、基盤層である(同③～⑩層)。このうち③層上面が他のトレンチでの検出状況から遺構面となるが、この面から遺構・遺物は確認できなかつたため、深掘りを行ない下層の状況の確認を行つた。掘削深度までの基盤層は、砂層・シルト層・疊層となる。

第8トレンチ

第8トレンチの土層は、2層に大別できる(第15図)。

第1層は、近世以降の耕作土である(第8トレンチ①～③層)。第2層は、遺物包含層である(同④層)。この層からサヌカイト剥片・土師器・須恵器が出土した。他トレンチの状況からこの層上面を遺構面と認識していたが、時間的制約のため下層の掘削を実施しなかつた。

第9トレンチ

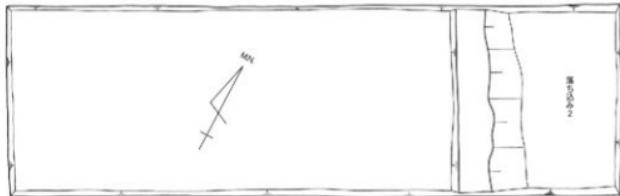
第9トレンチの土層は、4層に大別できる(第16図)。

第1層は、近世以降の耕作土である(第9トレンチ①～③層)。第2層は、基盤層である(同⑦～⑨層)。この層から遺構(溝①・②)を検出した。また下層は黒褐色砂質土で、サヌカイト剥片・縄文土器・土師器・須恵器などを包含する。第3層は、溝埋土である。埋土は灰白色砂質土がベースとなっている。溝は比較的大型の溝②と、それに直交する形の溝③がある。溝②は南西～北東方向に流れしており、上側の肩は直線的ではなく、また断面形も段形になっており何度も掘削と削平、堆積が繰り返されていたと推測される。溝②の埋土中よりサヌカイト剥片・縄文土器・土師器・須恵器などが出土したが、いずれも磨滅が著しく遺構の時期を示すものか、さらに検討が必要である。一方、溝③は直線的である。遺物は出土していないが、埋土の土質が溝②に近似していることから、ほぼ同時期の所産と考えたい。反対側の肩はトレンチ外になるため幅などは不明であるが、底部からの立ち上がりは確認できたため、さほど大規模な溝とは考えにくい。第4層(同⑩⑪)も基盤層である。上層に第2層下層である遺物包含層(同⑨層)が堆積していいたため、この層上面も遺構面である可能性があるが、時間的制約上、トレンチ際の深掘りにとどめた。

第10トレンチ

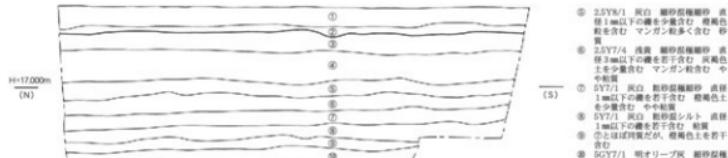
第10トレンチの土層は、3層に大別できる(第15図)。

第1層は、近世以降の耕作土である(第10トレンチ①～③層)。第1層下層は灰白色砂質土である。この層は第6トレンチ以南の第7トレンチから第11トレンチでも確認されている。第2層は、基盤層である(同⑤⑥層)。第5層は、黒褐色粘質土で磨滅の著しい弥生土器を包含している。この上面から落ち込み③が穿たれている。落ち込み③はトレンチ中央付近で東側に下っている。第3層は、落ち込み③の埋土である(同④層)。埋土から遺物の出土はなかつた。



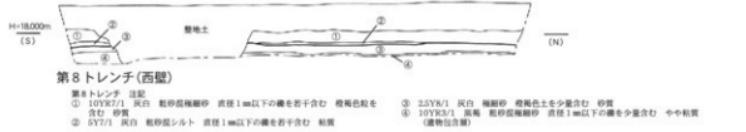
第6トレンチ

- 第6トレンチ 註記
 ① 2.5YR/1 黄灰、軽砂粗面繊維 細径1～5mmの繊を含む やや粘質
 ② 10YR/8/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を若干含む 褐褐色を含む
 ③ 10YR/8/4 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を若干含む 褐褐色を含む
 ④ 2.5YR/2 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を若干含む 褐褐色を少
 上層にマングン粒を少量含む やや粘質
 ⑤ 2.5YR/4 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を若干含む 褐褐色を多
 含む
 ⑥ 2.5YR/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を若干含む 褐褐色を含
 む 褐褐色土を少量含む やや粘質



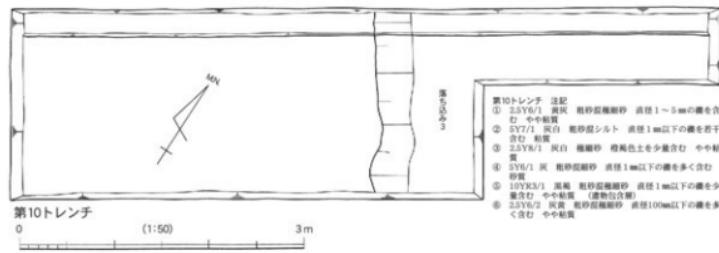
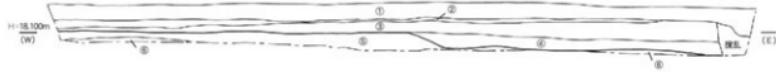
第7トレンチ(東壁)

- 第7トレンチ 註記
 ① 2.5YR/1 黄灰、軽砂粗面繊維 細径1～5mmの繊を含む
 やや粘質
 ② 10YR/7/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を若
 干含む 褐褐色を含む やや粘質
 ③ 10YR/8/4 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を含
 む
 ④ 2.5YR/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を少
 量含む やや粘質
 ⑤ 2.5YR/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を少
 量含む マングン粒多く含む 粘質
 ⑥ 5YR/7/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を少
 量含む やや粘質
 ⑦ 10YR/7/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を若
 干含む 褐褐色土を含む やや粘質
 ⑧ 10YR/8/4 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を少
 量含む 褐褐色土を含む やや粘質
 ⑨ 5YR/7/1 明テリーピーク、細砂粗面
 繊維 粘質
 ⑩ 5YR/7/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径
 10mm以下の繊を多く含む やや粘
 質(水隙)



第8トレンチ(西壁)

- 第8トレンチ 註記
 ① 10YR/7/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を若干含む 褐褐色を
 含む やや粘質
 ② 5YR/1 白灰、軽砂シルト 細径1mm以下の繊を若干含む 軟質
 ③ 2.5YR/1 白灰、褐褐色 硅褐色土を少量含む やや粘質
 ④ 10YR/3/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を少
 量含む (軟弱地盤)



第10トレンチ

(1:50) 3m

- 第10トレンチ 註記
 ① 10YR/1/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径1～5mmの繊を含
 む やや粘質
 ② 5YR/1/1 白灰、軽砂シルト 細径1mm以下の繊を若干
 含む やや粘質
 ③ 2.5YR/1 白灰、褐褐色 硅褐色土を少量含む やや粘
 質
 ④ 10YR/1/1 白灰、軽砂粗面繊維 細径1mm以下の繊を少
 量含む
 ⑤ 2.5YR/2 白灰、軽砂粗面繊維 細径10mm以下の繊を多
 く含む やや粘質

第15図 第6～8・10トレンチ平・断面図

第11トレンチ

第11トレンチの土層は、3層に大別できる（第16図）。

第1層は、近世以降の耕作土である（第11トレンチ①～③層）。第1層下層は灰白色砂質土で、第6トレンチ以南の第7トレンチから第11トレンチでも確認されている。第2層は、ピット埋土である（同④層）。この遺構の存在から第5層上面を遺構面、その下層を第3層の基盤層（同⑤⑥）と認識した。ただし、下層の黒褐色粘質土から弥生土器やサヌカイト薄片などの遺物が少量出土したため、さらに下層が本来の基盤層であった可能性も否定できない。

第12トレンチ

第12トレンチの土層は、3層に大別できる（第17図）。

第1層は、近世以降の耕作土である（第12トレンチ①②層）。第2層は、基盤層である（同③～⑩層）。この層から遺構（溝4）を検出した。第3層は、溝埋土である（同⑪～⑯）。埋土は灰白色砂質土がベースとなっている。溝は幅1.3m以上、深さ0.7mを測る。また断面形も段形になっており何度も掘削と削平が繰り返されていたと推測される。形状から自然河川を適宜整備しつつ灌漑などに利用していた可能性が高い。溝4の埋土下層（同⑩層）から摩滅した弥生土器細片およびサヌカイト製石器（石蹴）、サヌカイト剥片などの遺物が少量出土した。

第13トレンチ

第13トレンチの土層は、2層に大別できる（第17図）。

第1層は、近世以降の耕作土である（第13トレンチ①②層）。第2層は、基盤層である（同③～⑦層）。遺構は検出されなかったが、第12トレンチと同質の橙褐色砂質土が水平堆積していたため。他のトレンチと同様に遺構面と認識した。第3層上面より須恵器が、第4層上面より須恵器・土師器が少量出土した。

第14トレンチ

第14トレンチの土層は、3層に大別できる（第17図）。

第1層は、近世以降の耕作土である（第14トレンチ①層）。第2層は、基盤層である（同①②層）。この層から溝5を検出した。第3層は、溝埋土である（同③～⑩層）。溝の肩の断面も段形になっている上、埋土の堆積状況も複雑な様相を呈しており、何度も掘削と削平、堆積が繰り返されていたと推測される。第12トレンチ溝4と同様、自然河川を利用したものと推測できる。溝5の埋土上層（同④⑤層）および下層（同⑨⑩層）中より弥生土器が出土したが、いずれも摩滅が著しく原位置を保っているものはなかった。

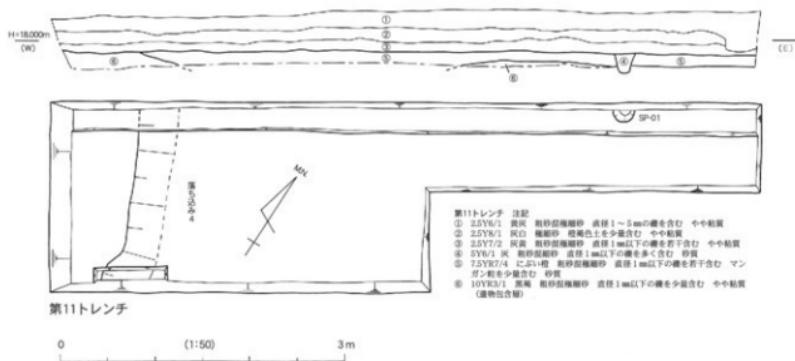
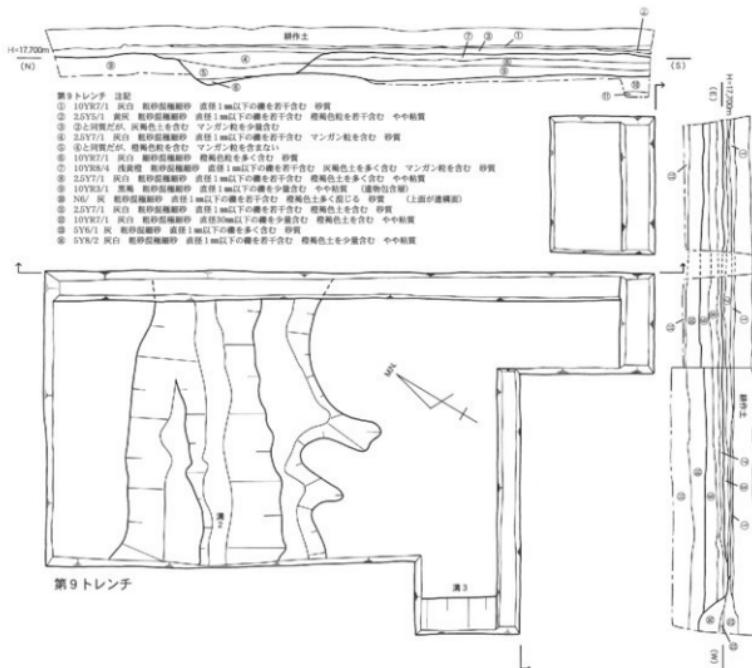
第15トレンチ

第15トレンチの土層は、3層に大別できる（第17図）。

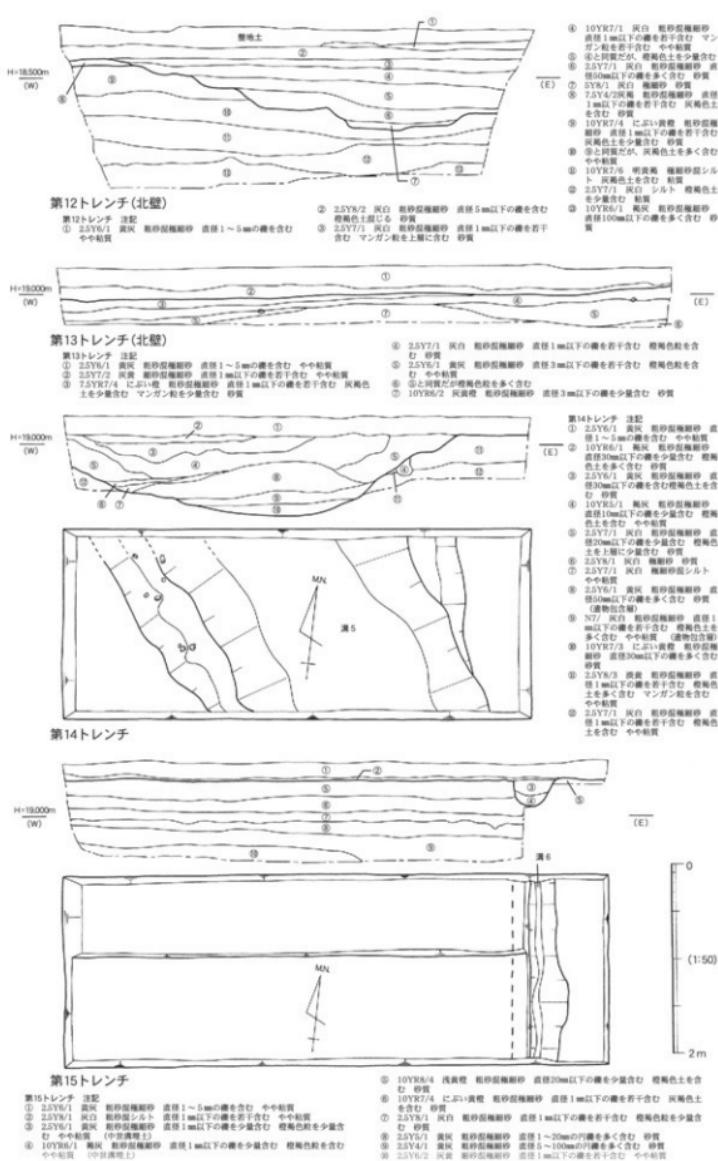
第1層は、近世以降の耕作土である（第15トレンチ①②層）。第2層は、基盤層である（同③～⑩層）。第6層中より弥生土器細片がごく少量出土した。ゆえに別の遺構面が存在する可能性も否定できない。第5層上面から溝6を検出した。溝6は幅0.4m、深さ0.3mを測り断面U字形の人工的な溝である。第3層は、溝埋土である（同③④）。埋土上層より弥生土器が出土したが、いずれも摩滅が著しい。

②遺物

出土遺物は15トレンチ合計で、18ℓ入りコンテナで2箱と少量である。大部分が弥生土器で、



第16図 第9・11トレンチ平・断面図



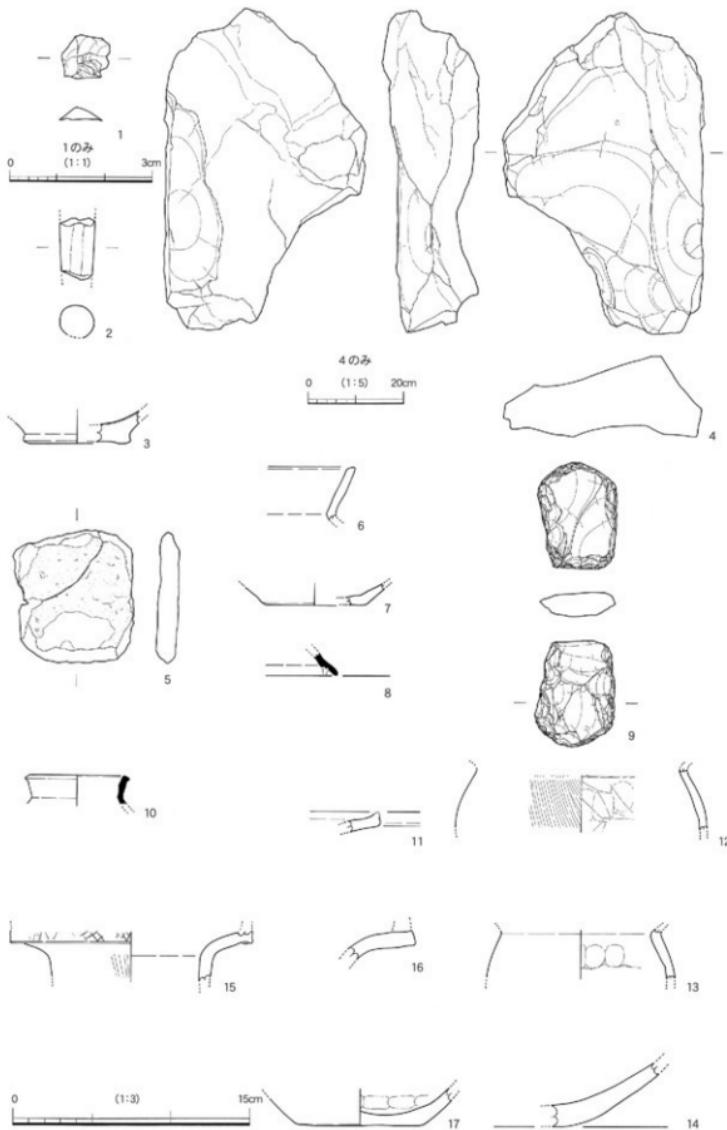
第17図 第12~15トレンチ平・断面図

いずれも磨滅が著しい。図化できたのは17点を数える（第18図）。以下、出土トレンチ順に解説する

1はチャート製の火打石である。第1トレンチ基盤層直上より出土した。2は土師質鍋の脚部である。第1トレンチ基盤層直上より出土した。上下とも欠損しているが、形状から端部付近と推測できる。縦方向の面取りを施す。3は白磁椀である。第5トレンチ第1層（②層）より出土した。底部はヘラケズリにより中心部分が若干凹んでいる。4はサスカイト製石核である。第8トレンチ第2層（④層）より出土した。重さ約5.6kgを量る。表裏両面に人為的な打撃痕が確認できる。5は安山岩製石鍬である。第9トレンチ第2層（⑨層）から出土した。風化が進み、刃部の加工痕がわずかに確認できるに過ぎない。下部に両刃が加工されている。中央部で欠損したものを再加工したと推測できる。6は弥生土器甕である。第9トレンチ第2層（⑧層）から出土した。口縁部のみ細片であり口径などは不明であるが、比較的小型のものと推測できる。端部は面を有し口縁部は直線的に伸びる。7は弥生土器の底部である。第9トレンチ第2層（⑦層）から出土した。8は須恵器壺蓋である。第9トレンチ溝2埋土上層（④層）より出土した。端部は丸く收める。受け部の返りは欠損する。陶邑・田辺編年のTK217併行期のものである。9はサスカイト製打製石斧である。第12トレンチ第3層下層（⑥層）から出土した。下部に両刃が丁寧に加工されている。10は須恵器短頸壺である。第13トレンチ第2層は基盤層直上（③層）から出土した。口縁部のみ残存する。端部は厚く肥厚し、外側に突出する断面三角形状を呈する。外面には自然釉が付着する。11・12・13は弥生土器甕、14は弥生土器底部、15・16は弥生土器壺である。ともに第14トレンチ溝5埋土上層（③層）から出土した。11は端部のみ残存する。端部を有し上方にやや突出する。12は体部上半のみ残存する。外面には縦方向のハケメ、内面には指頭による押圧調整のち板ナデ痕跡が残存する。口縁部との屈曲部分には接合痕が確認できる。13も体部上半のみ残存する。内面には横方向に連続する指頭による押圧調整が確認できる。口縁部との屈曲部分には接合痕が認められる。15は二重口縁壺の口縁部で、頸部から口縁部屈曲部までが残存する。端部は接合部より欠損する、口縁部は外面に斜格子状の線刻を付す。頸部は縦方向のミガキの痕跡が確認できる。内面はナデを施す。16は15と同様の二重口縁壺の口縁部である。17は弥生土器甕である。第14トレンチ溝5埋土下層（⑨層）から出土した。平底の底部のみが残存する。内面には底部成形時に生じた指頭による押圧調整の痕跡が明瞭に残存する。

第3節 調査のまとめ

調査地は永井遺跡の北側に隣接する。調査前には縄文時代の集落域が広がる可能性を視野に入れて調査を実施したが、明確な遺構は溝と落ち込みのみであった。これらの遺構は調査地の南半からのみ検出されており、遺跡の広がりは南側が中心であったと考えられる。落ち込みからは遺物の出土が殆どないため不確定なもの、埋土の土質などからいざれも中世の耕作に伴う遺構を想定したい。一方、溝は比較的大型の溝（第9トレンチ溝2・第12トレンチ溝4・第14トレンチ溝5）と小型の溝（第9トレンチ溝3・第15トレンチ溝6）に大別される。大型の溝は先述のとおり自然河川を利用したものと推測できる。一方小型の溝は直線的で断面U字状を呈し、明らかに人工的な溝である。共伴遺物がごくわずかなため時期判定には困難を伴うが、土質や形状などからおおむね弥生時代～古墳時代に機能していたと考えたい。



第18図 出土遺物実測図

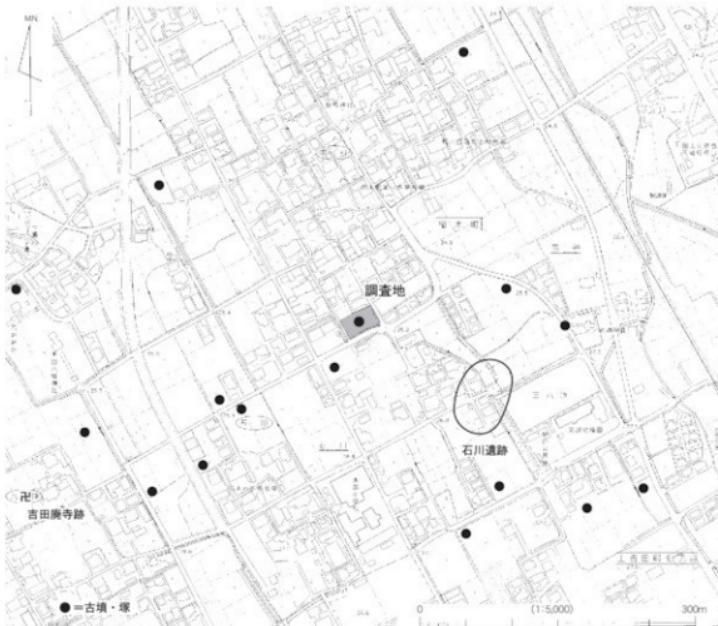
出土遺物は、いずれも摩滅を受けていたため、ほぼ全てが原位置からの二次的移動に伴うものと理解できる。本来の集落があった永井遺跡周辺から流出したものと考えたい。その中で、サヌカイト剥片の出土が目立つことはこの遺跡の特徴と言える。

いずれにしても検出された遺構が溝のみであったことから集落縁辺部であったことが予測できる。制約のあるトレンチ調査では、遺跡の性格付けなどを明確にすることはできなかった。また近接する永井遺跡や永井北遺跡との関連も不明なままである。今後の調査例の増加により、当遺跡の全貌が明らかになることを期待したい。

第5章 石川首塚遺跡

第1節 調査の経緯と経過

石川首塚遺跡は、市街地東方の住宅地と田園が入り込んだ箇所に位置する。この一画には周知の埋蔵文化財である石川首塚が所在しており、中央部には中世後半に遡る五輪塔部材などが基壇上に据えられていた。また、南側近接地には弥生時代の集落として古くから知られている石川遺跡が広がっている。このような状況の中、近年宅地造成の計画が持ち上がり、将来の開発に備えて予め遺構の状況を確認する必要が生じた。調査は平成22年1月13日から24日にかけて実施した。その結果、石川首塚と呼称されている石造物の直下は近現代の整地土であり、塚や墳墓に関する遺構は確認できなかったが、弥生時代の竪穴住居や大規模な溝などを検出した。のことからこれまでの遺跡名をとって石川首塚遺跡として登録した。発掘調査を年度末に実施したため、今年度は図面・写真整理や遺物整理などのみを行った。調査成果の詳細については次年度の報告書に掲載することとする。



第19図 調査地位置図

付章 菊塚古墳出土辻金具について

杉本 和江（古美術修理すぎもと）

第1節 はじめに

平成16年度に、善通寺市善通寺町所在 菊塚古墳出土の辻金具の保存処理を行った。本報告では、主としてこの辻金具¹について、保存処理の過程で得られた知見を報告する。なお、出土状況などについては「善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8 菊塚古墳 三井遺跡」²（以下 報告書8と称す）を参照のこと。

第2節 個別の知見

辻金具の破片を接合検討したところ、欠損はあるものの4個体が確認できた。以下遺物台帳の番号に従い、述べていく。なお、複数の破片が接合できた場合には、最も若い番号で代表している。

基本的な形態は中心部別造りの鉄地金銅装。4脚で銀被せの紙が各々3本付く。また、鉄地銀被せの貴金属が2条付き、それぞれに刻みがあり、2条で綾杉になる様にそろえて使われている。

総数は検討結果から、最低でも5点存在したと考えている。

① 辻金具1

10個ほどの破片が接合でき、僅かな欠損はあるもののほぼ完形となった。

環状部を側面から見ると、下縁から、垂直に立ち上がり、僅かに膨らみを持ちながら、すぼまつていく。上縁では、再び若干の垂直な立ち上りがある。

裏面を見ると、下縁と脚の縁に沿って銅板を被せた痕跡が見える。特に、脚部から環状部にかけてよく残っており、銅板を折り重ねていく順序や時には形に沿うように切れ目を入れているのがわかった（写真1～4）。

脚の紙が2つ並んだ部分は割れやすいようで、4つある脚のうち2つが同じ位置で割れて鉢孔の断面が観察できた。接合可能であったが、接合前に顕微鏡などで観察し記録することができた。

鉢孔は、表から裏へすり鉢状になっており、表に被せられた銅板がそのまま鉢孔に続いている（カラー写真1・2）。

辻金具の裏面には、様々な有機質が認められた。脚部では時に亀裂の入った、艶のある膜状の物質が多く認められた。革の可能性を考えている。また、環状部では別造りの中央部の一部と思われる物質が見つかっている。この別造り中央部については、別項を設けて報告する。

② 辻金具2

辻金具1より、若干環状部の幅が異なっている。脚1つを含む環状部の4分の1が欠損している。遺物の取り扱い等を考えて、環状部を樹脂で復元している。当該部の脚は環状部そのものが失われているため、確定はできないが、現時点では、一群の番号が振られている脚片の1つを同一個体と考えて、保管台上に安置している。

脚の裏面には、銅板を折り重ねた痕跡が確認できた。また、辻金具1で認められた革の可能性のある有機質も見られた。

③ 辻金具 3

基本的な形態は辻金具 1 に同じ。脚の 1 つでは、取り付く環状部部分がほとんどなかったが、かろうじて接合できた。接合面が少ないとや不安定な形態になることから、欠損部を樹脂で復元し環状にした。また別の脚は、鋤が 2 つ並んだ所から折れて、先端部分を欠損していた。他の部分で形態は推定できるので、復元は行わなかった。その結果、現在でもこの部分で鋤や鋤孔を観察することができる。

辻金具 1 同様に、接合前に顕微鏡などで観察し記録した。鋤に被せた銀は、鋤の裏からさらに打ち込まれた鋤脚にかけて認められた（カラー写真 3）。また鋤孔を観察すると、銅板の表面に鍍金層が認められた。明らかに鋤の下、鋤孔の口に懸っており、鍍金後に鋤が打ち込まれた事がわかる（カラー写真 4 白矢印）。

脚の裏にはまた、鰐のある膜状の物質が多く認められ、革の可能性を考えている。この有機物には脚先端から環状部に向かう方向に平行に駆が生じている。また、その分布は脚が途切れた部分で終わっており、環状部裏面にはほとんど認められない。

④ 辻金具 4

辻金具 1 より、若干環状部の幅が異なっており、辻金具 2 に近い。脚 2 つを含む環状部の 2 分の 1 が欠損している。欠損部が大きいことから復元はせずに、保管台で取り扱いの安定を確保している。欠損部の脚は、現時点では、一群の番号が振られている脚片の 1 つと形態がよく似た脚片を、推定位置に安置している。

他の例同様、脚裏の銅板折り返しが認められたが、他に比べて比較的不鮮明で、かわりに銅酸化物が多く認められた。また、膜状の有機物も認められた。

環状部裏面には、中央部の素材を推定させる有機物が付着していた。詳細は次項を参照。

⑤ その他

脚を含む環状部の一部や環状部のみの破片が計 4 点存在する。内 1 点は形態的な差異があり、他の 3 点と同一個体である可能性は低いと考える。鍍金層がなくなるなど劣化が激しく、確定できないが、上記 4 点の破片である可能性も残っている。今後、再度検討を加えたいと考えている。

第 3 節 中央部の素材について

報告書の時点では、素材が確定せず単に「有機質部品」としていた。馬具としての形態的な特徴から、「イモガイ」が最も可能性があると考えられたが、木製の例もあり検討を必要としていた⁵。

そこで、中央部の素材を推定するため、環状部裏面をデジタルマイクロスコープ（キーエンス（株）製 VHX-200 以下 VHX と略す）を用いて観察を行った。同時に貝製馬具として、貝本体⁴が遺存している例および現生貝の調査を行った。なお、現生貝の調査にあたっては、千葉県立中央博物館 上席研究員 黒住耐二氏より、「アンボンクロザメ」の提供並びに貝類に関するご教示を頂いた。

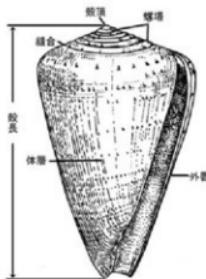
観察の結果、辻金具 1 と辻金具 4 の環状部裏面には脚部には見えない特徴的な有機質が認められた。環状部の下縁から続くこの有機質は、上縁よりわずかではあるが内側に向かって広がって残っていた。どのような物質であったかは別として、この有機質が中央部の素材の一部である可能性が高い。なお、便宜上環状部の上縁から下縁に向かう方向を垂直、これに直行する方向を平

行として記述していく。

①辻金具1では、細い「筋」が垂直方向に僅かに蛇行し、所によっては、斜めや平行に走るなど、複雑な様相を呈している部分も見える（カラー写真5・6）。凹凸がわかりにくいが、この「筋」のように見えているのは、実際には層状の物質の小口が見えているように思われる。

②辻金具1では、垂直方向の「歛」が並んでいるように見える。そのすぐ上には、緩やかなカーブを描いて平行に流れる「歛」も認められる。「歛」を詳しく見ると、辻金具1とは見え方は異なるが、この「歛」も層状の物質の小口がみえているように思われる（カラー写真7・8）。

仮にこの有機質が貝であったと推定すると、貝のどのような部分がどのような形で変化したか推定する必要がある。



第20図 貝の各部の名称
註7 「動物系統分類学」
より一部改変

貝の種類としては、イモガイが挙げられていたが、同種の中でも「アンボンクロザメ」と「クロフモドキ」の2種類があるとの指摘があった⁵。そこで、まず現生の「アンボンクロザメ」を装填された状態に切削し観察を行った（カラー写真9・10）。ついで、切削によって現れた貝の表面を、千葉県富津市所在九条塚古墳出土と伝えられる貝製辻金具及び東京国立博物館所蔵 姫塚古墳出土貝製辻金具の貝表面と比較した⁶。

まず、環状部に装填される貝がどの程度切削されたか推定した。判断基準としては、1つには現在装填されたまま残っている貝や貝製辻金具が全て白色であることから、螺頭は白色になるまで切削されたと考えられる（カラー写真11）。

また、貝装馬具を観察すると、殻頂が環状部の中心に来るよう工夫されており、貝は殻頂が環状部の中心になり、なおかつ円形に合うように加工されたと考えられる。

「アンボンクロザメ」の体層の最外層は、本調査例でも螺頭部付近で3mm～5mmとかなりの厚みがある⁷。しかし、この貝の体層は成長して内部に取り込まれると、溶かされて人の爪よりも薄く脆くなる。そのため、螺塔部を除くと切削が可能な範囲は最外層と外唇から若干中に入った部分に限られている。木や金属のように大きめの材料を切削加工して寸法あわせをする、とはいえない部分がある。このことから貝装馬具の製作には、ある程度の計画性が求められたと推定している。

今回は最大直径が3.7cmの「アンボンクロザメ」の螺塔を水平に、縫合の班紋が残る程度に切削した（カラー写真12）。肩は、一旦はそのままの形状を残し、体層の一部を1cm幅で切削した。その後、肩にかかる斑紋の表面を削って、完全に消えるまで切削した。なお、殻長方向を垂直、これに直行する方向を水平と記す。

螺頭を水平に切削すると縫合で、班紋の色が残りなかなか白一色にはならない。しかし、班紋自体は、その表面に平行に切削すると比較的容易に消える。

螺頭の班紋が完全に消えていない段階ではあるが、VII Xで観察すると、カラー写真13に見るように「白い筋」を見る事ができる。（現時点では「白い筋」と表記するが、これはあくまでも表面に現れた見た目であって、実態全てを表しているのではない⁸。場所によって方向が異なり、肩から縫合までは、約4mmの間で、縫合と平行に近い形で走るように見え、縫合の手前で平仮名

の「く」の字に見える層がある。縫合より内側にも一層、さらにその内側にも縫合に対して斜めに走るように見える部分が存在している。この層は次の縫合の手前まで続き、異なる層を挟んで縫合に至る。

よく似た様相は、九条塚例の螺塔に当たる部分で見ることができた。ただし、現生貝とは異なって、凹凸のある「白い筋」として見える（カラー写真14）。

一方、肩から体層では、現生貝では、斑紋が残っている場合では、螺塔から肩にかけて「白い筋」が襷掛けに走っている。体層にいたると、「白い筋」は平行に走っているのみである。殊に、斑紋部分は斑紋は薄くなるに従って、白い筋がはっきりと見えてくる。さらに、肩下の体層を2mmほど切削すると、今度は「白い筋」が垂直にみえた。

貝製辻金具の当該部分を観察すると、姫塚例では「白い筋」が中心から肩を襷掛けにはしり、側面ではほぼ垂直になっている（カラー写真15）。九条塚例の様相はきわめて複雑で、側面の現表面では平行に、側面にできたえぐれの底では垂直になっている（カラー写真16）。

これらの観察から、貝製辻金具には、「アンボンクロザメ」の貝表面の特徴がよく残っていることがわかった。一方、この貝表面の様相と菊塚例の有機質を比較すると、「白い筋」と「筋」や「歛」とが対応すると考えれば、よく似た様相を呈していると見られた。装填には貝の螺塔と若干の体層が使用されていることから考えても、環状部内部に螺頭部などの様相に似た有機質が残っているのは理解可能な状況といえる。

しかし、今回の観察では貝の何がどのように変化したかについては、明らかにする事はできなかった。同じ種類の有機物を装填されていたであろう辻金具1と4でも、その遺存状態が異なっている。辻金具1では「筋」と「筋」の間が明らかに空洞化しているのに、辻金具4にはそうした空洞化は見られない。こうした変化の違いが何に起因するのかもわからなかった。これらの問題が解決しない以上、根本的な問題である貝装馬具であるとのは断定できない。現時点では、環状部に遺存する有機質が貝表面の様相と似ている事やこの有機質が貝特有の遺存状態を示しているではないかといった点を指摘するに留める。

本来、貝の構造などについては、まったくの素人であり、十分理解しているとは言えない。今後は貝の劣化実験や貝殻構造との関連などを通じてさらに、検討を深めていきたいと考えている。とはいえ、至らぬ点があまりに多く、多方の御叱正を請う次第である。

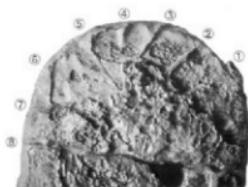
九条塚古墳遺物の調査にあたっては、富津市教育委員会並びに同委員会 小沢洋氏に、姫塚古墳遺物については、東京国立博物館 日高慎氏 九州国立博物館 河野一隆氏に多大なご配慮頂いた。ここに記して感謝の意を表します。

1 大久保奈奈1995「イモガイと飾り鉢」「古代探叢IV - 滝口宏先生追悼考古学論集-」同論集編集委員会

本稿では、従来「貝製雲珠・辻金具」と呼ばれていた遺物に関して、上記の論文註(3)に述べられる「〈素材を異にする二つの部品の組み合わせ〉を表示すること」と「雲珠・辻金具本体の機能を担うのは金属部品であり、イモガイは、装饰のために特に選択された素材・部品である」との定義を取ることとした。但し、中心部の造りが「イモガイ」ではない可能性もあるため、単に「貝装雲珠・辻金具」とする。

- 2 海邊博史編2003「善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」8 菊塚古墳 三井遺跡 善通寺市教育委員会
- 3 宮代栄一 1989 「いわゆる貝製雲珠について」『駿台史学』76号 駿台史学会
- 4 厳密には貝殻とすべきであるが、慣習上単に貝としても貝殻を指すことから、本稿では貝の表記を取った。
- 5 黒住耐二氏のご教示による。
- 6 姫塚古墳出土とされており、現富津市青木所在の古墳。出土遺物は、東京国立博物館 1986『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇(関東Ⅲ)』の「78 富津市青木948出土遺物」が相当し、本貝製馬具は「雲珠残片」として掲載されている。
- 7 岩田文男他1999『動物系統分類学5(下)軟体動物(Ⅱ)』中山書店
以下貝に関する主な参考文献
- 大越健嗣2006『貝殻・貝の歯・ゴカイの歯』ペルソーブックス008 成山堂書店
- 奥谷喬司1997『貝のミラクル』東海大学出版会
- 松井章編2003『環境考古学マニュアル』同成社
- 西本豊弘・松井章編1999『考古学と自然科学② 考古学と動物学』 同成社
- 8 このように見えるのは、貝殻構造に起因していると推定しており、その点も明らかにしたと考えている。

写真1



辻金具1の脚裏面

(辻金具1の12時の方向にある脚)

①から②へと順に折りたんだ痕跡が残る。
 ④以下の部分では折り畳みの幅が大きく広がっている。これらの痕跡を示す面上には、この面を界面にしてばらばらと簡単にはがれる鉛のような物質が存在している。この鉛のような物質を保存したため、痕跡がどこまで広がっているかは確認できなかった。

写真2



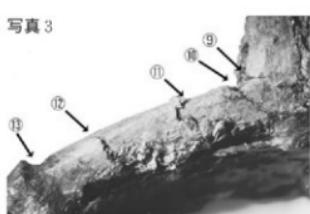
⑧は接合面。

⑨には切れ目がはいっている。ここで胴部に近い部分が下になって、脚部側が上になっている。脚部先端からの流れで考えれば、重なりが逆転している。

⑩も接合面。本来の切れ目か「割れ」なのかは不明。

⑪もダーツが必要となるが、畳まないで切れ目を入れて重ねている。こうした、銅板の処理は同一個体のなかでも、脚によって様々である。

写真3



⑪・⑫と、環状の胴部にそうように切れ目を入れている。⑬→⑭の順で上に重なっている。

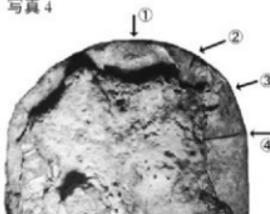
⑮は接合面

胴部では、銅板は折り返すだけで、本例の様に折り重ねたり、切れ目を入れている所は少ない。

鉄地金銅装金具における銅板の「被せ」に関しては、復元製作や遺物の観察によって、多くの類例が報告されている。

(辻金具1の9時の方向にある脚)

写真4



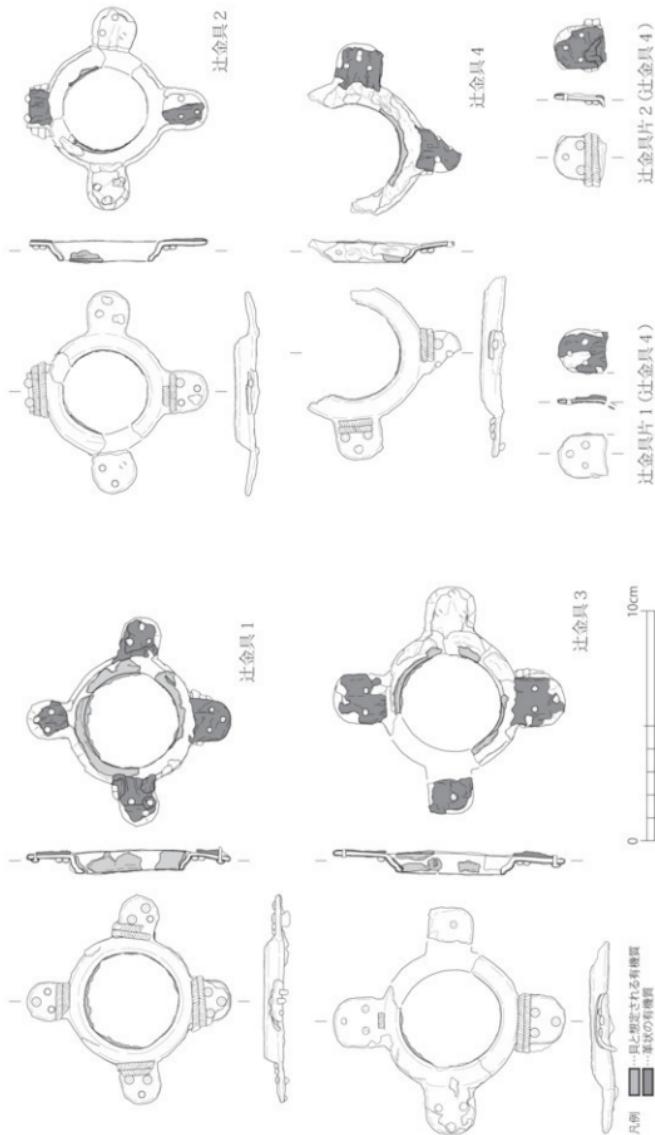
①は折り返しの初め

②では①で出来た折り目を内側に畳み込む

③では②で出来た横方向から畳み込む

④では③で出来た折り目を横方向から畳み込む。直線部分にいたたのでそのまま畳み込んでいく。⑤から④に至る過程で生じる折角はそのままになっている。

本例のように折り畳みの幅が比較的広いと角になりやすく、きれいな丸みや直線となっていないことがある。



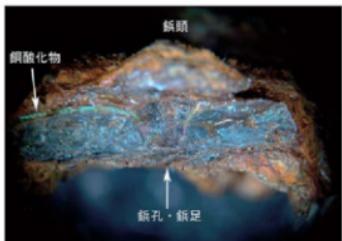
第21図 付金具実測図 ($S = 1 : 2$)



1



3



2



4



5



6



7



8



15

16

【主要参考・引用文献】

【調査報告書】

- 海邊博史編2002『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』7 旧練兵場
遺跡・四国学院大学構内遺跡・菊塚古墳 善通寺市教育委員会
- 海邊博史編2003a『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』8 菊塚古
墳・三井遺跡 善通寺市教育委員会
- 海邊博史編2003b『四国学院大学構内遺跡』 善通寺市埋蔵文化財発掘調査団・善通寺市教育委
員会
- 海邊博史編2004『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』9 菊塚古墳・
善通寺市旧境内・善通寺陣所跡・旧連兵場遺跡 善通寺市教育委員会
- 香川県教育委員会2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』
- 香川県教育委員会2005『香川県の近代化遺産- 香川県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書-』
- 片桐孝浩1992『川津元結木遺跡』中小河川大東川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香
川県教育委員会
- 片桐孝浩2002『原間遺跡』I 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第39冊 香川
県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 片桐孝浩2008『弘田川西岸遺跡』広域基幹弘田川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 香川
県教育委員会
- 國木健司1993『生野本町遺跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会
- 笠川龍一1983『五条遺跡発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会
- 笠川龍一1985『彼ノ宗遺跡』弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 善通寺教育
委員会
- 笠川龍一1986『仙遊遺跡発掘調査報告書』 旧練兵場遺跡仙遊I地区 善通寺市教育委員会
- 笠川龍一1988『九頭神遺跡発掘調査報告書』 九頭神遺跡発掘調査団・善通寺市教育委員会
- 笠川龍一1989a『稲木遺跡』県道西白方善通寺線櫻藪踏切除却工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報
告書 稲木遺跡発掘調査団
- 笠川龍一1989b『仲村庵寺』 善通寺市教育委員会
- 笠川龍一1991『月信遺跡』県営畑地帯総合整備事業善通寺西部地区碑殿農道建設に伴う埋蔵文化
財発掘調査報告書 月信遺跡発掘調査団
- 笠川龍一1992『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』 善通寺市教育委員会
- 笠川龍一1993a『御館神社古墳発掘調査報告書』善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財發
掘調査報告書 I 善通寺市教育委員会
- 笠川龍一1993b『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)調査報告書』史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)保存整備
事業に伴う発掘調査報告書 善通寺市教育委員会
- 笠川龍一1993c『永井遺跡発掘調査報告書』都市計画道路大通線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告書 善通寺市埋蔵文化財発掘調査団
- 笠川龍一1994『青龍古墳発掘調査報告書』善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調

査報告書2 善通寺市教育委員会

笠川龍一1995『九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地調査報告書』善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 善通寺市教育委員会

笠川龍一編1996『香色山山頂遺跡群発掘調査報告書』善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 善通寺市教育委員会 1996年

笠川龍一編1997『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)保存整備事業報告書』善通寺市教育委員会

笠川龍一1999『山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書』善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 善通寺市教育委員会

笠川龍一2001『鉢伏山北東麓遺跡群・菊塚古墳発掘調査報告書』善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6 善通寺市教育委員会

笠川龍一編2003『史跡有岡古墳群(野田院古墳)保存整備事業報告書』 善通寺市教育委員会
佐藤竜馬2003『生野南口遺跡』 香川県教育委員会

角南聰一郎ほか2001『旧練兵場遺跡』市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
善通寺市・(財)元興寺文化財研究所

角南聰一郎ほか2002『旧練兵場遺跡』特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 善通寺市・(財)元興寺文化財研究所

西岡達哉編1989『稻木遺跡』四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 香川県教育委員会

西岡達哉編1995『龍川四条遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第15冊
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

西岡達哉編1997『旧練兵場遺跡』国立善通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報第1冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

西岡達哉編1998『旧練兵場遺跡』国立善通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報第2冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

廣瀬常雄1994『金蔵寺下所遺跡・西碑殿遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

松本豊胤・森本義臣・東原輝明1983『王墓山古墳調査概報』 善通寺市教育委員会

松本敏三1987『県道西白方善通寺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和61年度 善通寺市・香川県教育委員会

真鍋昌宏ほか1987『中村遺跡・乾遺跡・上一坊遺跡』四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 香川県教育委員会

真鍋昌宏・渡部明夫1987『矢ノ塚遺跡』四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第3冊 香川県教育委員会

真鍋昌宏2003『山南遺跡』県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

森 格也2003『北原2号墳・北原遺跡』県道觀音寺善通寺線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

森下英治1996『旧練兵場遺跡』Ⅲ 平成7年度国立善通寺病院内発掘調査報告 香川県教育委員会

- 森下英治2001「善通寺市旧練兵場遺跡における弥生土器の編年と地域性の検討(上)」「研究紀要」
Ⅹ 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
安田和文・笹川龍一1981『仲村庵寺発掘調査報告』旧練兵場遺跡内 善通寺市教育委員会
渡部明夫1990『永井遺跡』四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第9冊
香川県教育委員会
渡邊淳子編2005『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』10 善通寺市
旧境内・善通寺陣所跡・四国学院大学構内遺跡・菊塚古墳・樽池西手山頂墳3号 善通寺市教育委員会
渡邊淳子編2006『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』11 善通寺市
旧境内・善通寺陣所跡・旧善通寺偕行社・菊塚古墳・樽池西手山頂墳3号 善通寺市教育委員会

【書籍・論文など】

- 安藤文良編1974『古瓦百選』讃岐の古瓦 美巧社
安藤文良1987『歴史時代・古瓦』『香川県史』第13巻 資料編考古 香川県
井上和人2003『古代土器製作技法考再説—近畿地方の瓦器楕・土師器杯類と丸底甕—』『文化財
論叢—奈良文化財研究所創立50周年記念論文集』Ⅲ
川畑 聰1996『讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館
新編香川叢書刊行企画委員会1983『新編香川叢書』考古篇 香川県教育委員会
善通寺市1977『善通寺市史』第一巻
田辺昭三1981『須恵器大成』 角川書店
中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
西 弘海1979『西日本の土師器』『世界陶磁全集』2 日本古代 小学館
西 弘海1986『土器様式の成立とその背景』 真陽社
藤井真正1983『讃岐国古代寺院の研究』『藤澤一夫先生古希記念論集 古文化論叢』
矢原高幸1973『善通寺市の古代文化』 善通寺市

写 真 図 版



1. 第1トレンチ遠景
(南から)

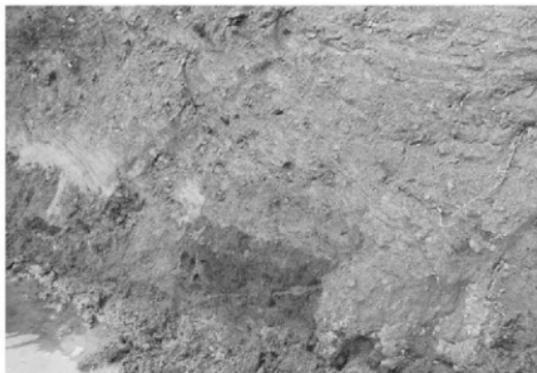


2. 第1トレンチ土層断面
(東から)



3. 第2トレンチ近景
(西から)

図版 2 弘田川西岸遺跡



1. 第2トレンチ造構断面
(南から)



2. 第3トレンチ遠景
(南から)



3. 第3トレンチ断面
(東から)



1. 第1トレンチ東壁
(西から)



2. 第1トレンチ東壁埋設
(西から)



3. 第2トレンチ地下室状遺
構検出状況(北西から)

図版4 本村道上遺跡



1. 第2トレンチ地下室状遺構完掘状況
(東から)



2. 第2トレンチ地下室状遺構(便所)完掘状況(北から)



1. 第2トレンチ地下室状遺構北側通路(南から)



2. 第2トレンチ地下室状遺構南側通路(北から)

図版 6 本村道上遺跡



1. 第3トレンチ東壁
(西から)



2. 第3トレンチ全景
(南西から)



3. 第3トレンチ遺構埋土
(南西から)



1. 第3トレンチ遺構完掘
状況(南から)



2. 第4トレンチ深掘り
状況(南から)



3. 第4トレンチ深掘り
内 SP-04(東から)

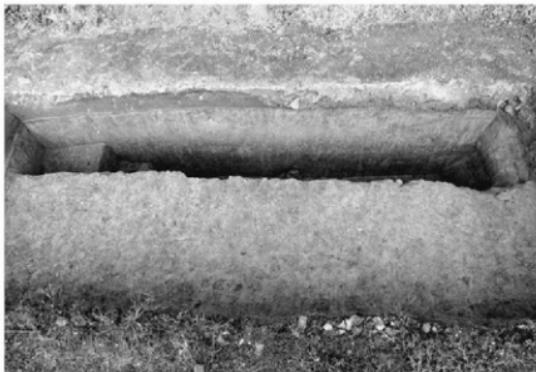
図版 8 永井櫻田遺跡



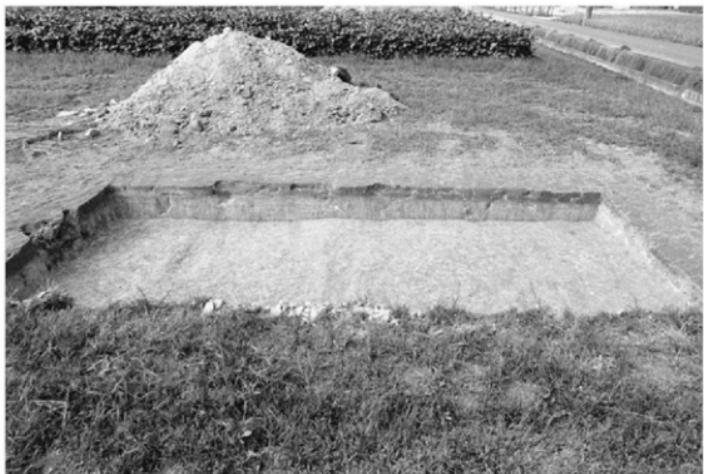
1. 第1トレンチ全景
(南から)



2. 第1トレンチ溝断面
(南から)



3. 第2トレンチ全景
(南から)

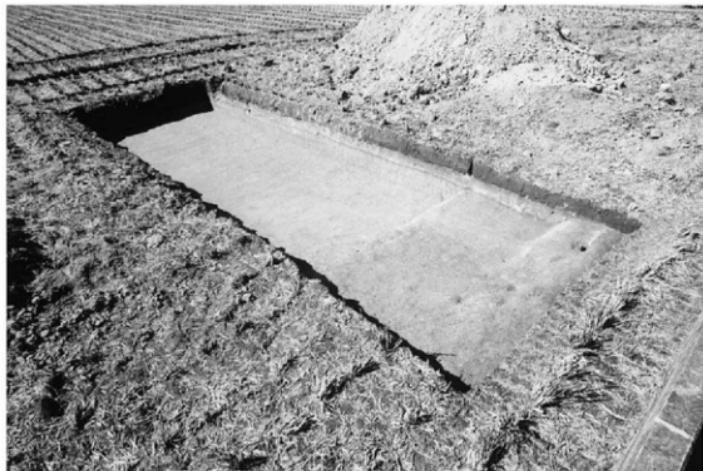


1. 第3トレンチ全景(南から)



2. 第4トレンチ全景(南から)

図版10 永井榎田遺跡



1. 第5トレンチ全景(南東から)



2. 第5トレンチ落ち込み(東から)



図版12 永井櫻田遺跡



1. 第7トレンチ全景
(西から)



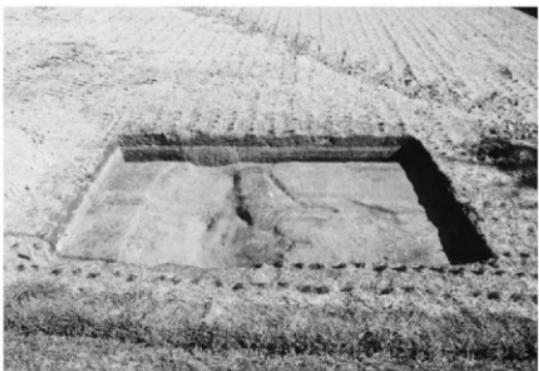
2. 第7トレンチ堆積状況
(西から)



3. 第8トレンチ全景
(東から)



1. 第9トレンチ北側溝
検出状況(西から)



2. 第9トレンチ北側溝
完掘状況(西から)



3. 第9トレンチ北側溝完掘
状況拡大(西から)

図版14 永井榎田遺跡



1. 第9トレンチ北側溝堆積
状況(西から)



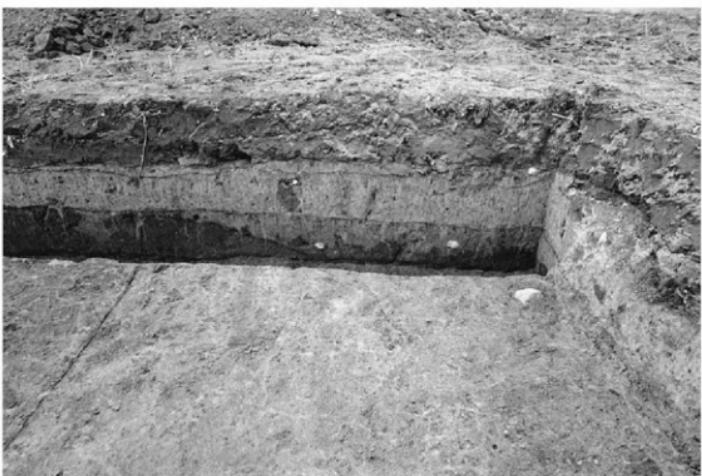
2. 第9トレンチ深掘り・
拡張部完掘状況(北から)



3. 第9トレンチ南側溝堆積
状況(北から)



1. 第10トレンチ全景(南から)



2. 第10トレンチ落ち込み堆積状況(南から)

図版16 永井櫻田遺跡



1. 第11トレンチ全景(南から)



2. 第11トレンチ落ち込み検出状況(南東から)



1. 第12トレンチ全景
(南東から)



2. 第12トレンチ溝堆積状況
(南から)



3. 第13トレンチ全景
(南から)

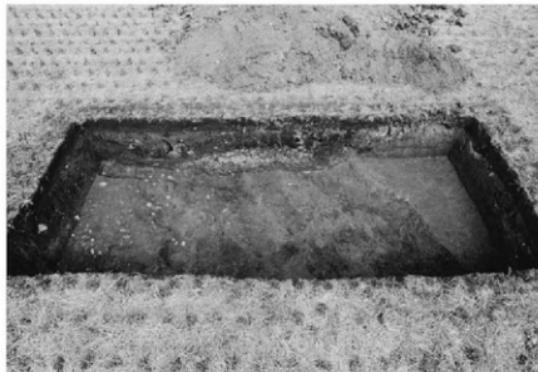
図版18 永井櫻田遺跡



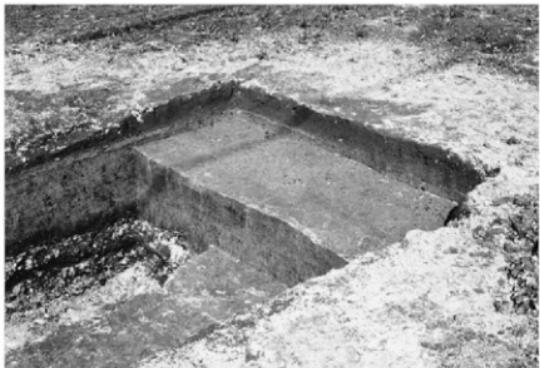
1. 第14トレンチ溝検出状況
(南東から)



2. 第14トレンチ溝埋土堆積
状況(南から)



3. 第14トレンチ溝完掘状況
(南から)



1. 第15トレンチ溝検出
状況(南西から)



2. 第15トレンチ溝堆積
状況(南から)



3. 第15トレンチ全景
(南から)

報告書抄録

ふりがな	ぜんつうじしないいせきはっくつちょうさじぎょうにともなう まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	12							
副書名	弘田川西岸遺跡 本村道上遺跡 永井櫻田遺跡 石川首塚遺跡 菊塚古墳							
シリーズ番号								
編著者名	海邊博史・杉本和江							
編集機関	善通寺市教育委員会 生涯学習課							
所在地	〒765-0013 香川県善通寺市文京町二丁目1番4号							
発行年月日	平成22(2010)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
弘田川 西岸遺跡	善通寺市善通寺町920-1	00117	34 13 39	133 46 09	20090508～ 20090513	107.5m ²	善通寺市内遺跡発掘調査事業	
本村道上 遺跡	善通寺市善通寺町2-2・3	00537	34 13 19	133 46 47	20090914～ 20090917	64.0m ²	(遺跡確認調査事業)	
永井櫻田 遺跡	善通寺市中村町442-2、下吉田町803-6ほか	00538	34 14 23	133 46 22	20090929～ 20091002 20091015～ 20091020	173.0m ²		
石川首塚 遺跡	善通寺市稻木町字石川394-1	00250	34 14 13	133 46 53	2010113～ 20100124	30.3m ²		
菊塚古墳	善通寺市善通寺町字大池東	00012	34 12 35	133 46 15	20090721～ 20100331	—	(出土遺物保存処理)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
弘田川西岸 遺跡	集落	弥生時代	—	弥生土器				
本村道上遺跡	集落	中世・近代	土坑・ピット	須恵器・陶磁器・瓦	近代の半地下室検出			
永井櫻田遺跡	集落	縄文・弥生・中世	溝	縄文土器・弥生土器・石器				
石川首塚遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居・溝	弥生土器	大溝より遺物集中			
菊塚古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室	—	出土遺物保存処理			

善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書12

弘田川西岸遺跡
本村道上遺跡
永井榎田遺跡
石川首塚遺跡
菊塚古墳

平成22(2010)年3月31日

発行 善通寺市教育委員会
〒785-0013 香川県善通寺市文京町二丁目1番4号
TEL 0877-63-6328 FAX 0877-63-6348
印刷 (有)西村謄写堂
〒780-0901 高知県高知市上町一丁目6番4号